

平成26年度

市民研究員 研究報告書



『スポーツを生かしたまちづくり』

平成27年3月

公益財団法人 福岡アジア都市研究所

『スポーツを生かしたまちづくり』

研究スタッフ

吉 田 勝

古 川 富 美 子

森 満 美 枝

はじめに

福岡では、一昨年12月の「ISUグランプリファイナル」、昨年11月に新しく生まれ変わって第1回目が開催される「福岡マラソン」などの大型スポーツイベントにより、市民のスポーツに対する関心や、スポーツと地域との結びつきが高まりつつあります。

スポーツは、年齢や性別、国籍を問わず多様な人々の交流を深め、体を動かすことによる健康増進、人々や地域の紐帯強化、スポーツ振興という視座からのインフラ整備、さらにはスポーツ関連イベントに伴う賑わい創出や情報発信など、都市の活力・魅力の向上に様々な形で影響を与える力を持っていると考えられます。スポーツの持つ多様な力を、我々が生活するまちの中で、より具体的・効果的に活用できれば、福岡のまちづくりに大きく役立つとともに、様々な交流の輪が広がることでしょう。そこで、当研究所では、スポーツをまちづくりの一つの切り口として捉え、「どのようにスポーツを生かすまち」を作っていくのかを考えるべく、平成26年度市民研究員の研究テーマを『スポーツを生かしたまちづくり』とし、市民のみなさんから研究員を募集しました。

今年度は3名の市民研究員が、昨年7月から約8か月間にわたり、それぞれに感心のある個別テーマについて研究しており、様々な角度から調査・研究を進めました。

本報告書はその成果となります。なお、本報告書で論じられている内容は、市民研究員それぞれが文献調査・ヒアリング調査を行ってまとめたものであることを付記します。

読者の皆様のご一読と、忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

目 次

個別研究報告

○ボウリング場を活用したまちづくり

ー福岡市南区大橋地区での挑戦ー

吉田 勝・・・ 1

○ささえるスポーツと学生

ースポーツボランティア活動参加に関する研究ー

古川 富美子・・・ 23

○スポーツをする人をサポート

ー食の観点からー

森満 美枝・・・ 31

市民研究員 平成 26 年度のあゆみ

個 別 研 究 報 告

ボウリング場を活用したまちづくり ー福岡市南区大橋地区での挑戦ー

市民研究員 吉田 勝

1 はじめに

スポーツは、世界共通の人類の文化である⁽¹⁾。

文部科学省が策定したスポーツ基本法（平成23年6月24日に、平成23年法律第78号として公布）の冒頭である。さらに「また、スポーツは、人と人との交流及び地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである。さらに、スポーツは、心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たすものであり、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠である」とある。

スポーツは、年齢や性別、国籍を問わず多様な人々の交流を深め、体を動かすことによる健康増進、人々や地域の紐帯強化、スポーツ振興という視座からのインフラ整備、さらにはスポーツ関連イベントに伴う賑わい創出や情報発信など、都市の活力・魅力の向上に様々な形で影響を与える力を持っていると考えられている。

スポーツの持つ多様な力を、我々が生活するまちの中で、より具体的かつ効果的に活用できれば、必ず福岡のまちづくりに大きく役立ち、交流の輪が広がり、人々の笑顔が増え街が輝いていくであろう。

今回の研究発表には、私が行ってきた宮城県気仙沼市でのボウリング場を活用したまちづくり活動を基に、福岡市南区大橋地区で、地域のリーダーや企業オーナーそして大学生と共に行っている活動を発表させて頂きたい。その中で、この活動の背景・目的並びに課題を見つめながら『ボウリング場を活用した福岡のまちづくり』を提案したい。

2 研究のきっかけ

（１）出会い

私は現在、福岡市南区大橋にあるボウリング場「大橋シティボウル」でマネージャー勤務をさせて頂いている。福岡に来るきっかけとなったのが、2011年の東北大震災直前まで勤務していた宮城県気仙沼市のボウリング場「気仙沼さくらボウル」であり、私が気仙沼さくらボウルで最後のプレゼンを行ったのが、大橋シティボウルの親会社であるスポーツ・ガーデン株式会社の高橋社長である。

気仙沼さくらボウル時代、私は初めてボウリング経営に携わった。ボウリングと言うスポーツは、3歳から80歳代までの全世代がプレイヤーとなり一緒になって楽しめる上、天候も気にせずプレイ出来るという数少ない生涯スポーツでもあり、子供たちの成功体験が身近に感じられ、障害を持つ方も気兼ねなく楽しめるスポーツだと実感していた。

人口が約7万人弱の気仙沼市で、1年間の来場者数が35,000人強を誇るボウリング場は、まさにまちづくりの拠点とも言うべき場所である。

その中で、日々ボウリングをプレイする方を観察していると、高齢者仲間で定期的に集まり楽しく投げているシニア世代、曾孫と一緒に投げて楽しんでいる80代の老夫婦、子どもが出したストライクをみんなで褒め合っているファミリー、投球に一喜一憂して抱き合っていて喜んでいる学生達、一人で黙々と投げている会社社長、会社の仲間と盛り上がっているサラリーマン、昼間からお酒を飲みながら談笑して投げている漁師たち等々、共通して言えることはみんな笑顔で溢れているし、輝きに満ちている。

（２）まちづくりに必要なもの

「ボウリング場ってこんなに笑顔が溢れるんだ…」みんなが笑顔になる楽しい空間でもあり、老若男女が集い、地域コミュニティーの場にもなるボウリング場で「何かまちづくりに繋がる事が出来無いか？地域活性化に繋がらないか？」と言う事を常に模索していた。

気仙沼市で学んできた活動は、年間数万人もの来場者を誇るボウリング場を中心として、まちづくりの原点ともいえる【人と人とのコミュニケーション】を繋ぐことであり、【地域商店の発信を行う事での地域活性化】であったと言える。そして、大切な事は【まちづくりはひとづくり】であるということ。

そんな事を模索している時に起きた大きな出来事。それが、2011年3月11日の出来事【東北大震災】である。当時、仕事で神奈川県で被災した私は、何とか泊れた宿泊先のホテルで見た映像を一生忘れないだろう。大津波警報、気仙沼市街は燃え盛る炎、過ぎる不安。何も出来ぬまま眠れぬ夜を迎え、準備を踏まえて3日後に気仙沼入り。そこで見た光景は…まさにこの世の終わりを感ずるほどの衝撃だった。

（３）地域の魅力を活用する

ちっぽけな人間が出来る事なんて大したことはない。だからこそ、出来ることを出来るレベルで継続しながらやり続けると言う事が大切なのだろうと感じながら過ごしていた。

また、ボウリング業界に足を踏み入れてから、自分たちの街を更に良くしよう！と言う地域リーダーや企業オーナー、指導者や学生達との接点が大幅に増えている。いかにボウリングと言うスポーツが地域と密接であるか、ボウリング場と言う場所が地域と連携できるかを感じさせられている。

今回の研究を通じ、福岡の地域の課題を見つめなおし、更なる魅力を引き出し、定期的なスポーツイベントの実施を行い、来場者へ向けた発信で接点を繋げて行きたい。

3 研究の背景及び研究の目的

近年のスポーツ参加人口の現状と変化、データから見てきた環境と時代の流れを基に課題を見つけ出し、いつ頃から、何が原因でスポーツの参加人数が減少をし続けているのか？の原因を探ってみる。そして、なぜ「ボウリング場を活用したまちづくり」なのか？』を解説させて頂きたい。

（１）近年のスポーツの参加者数

まずは、スポーツにおける過去25年間の男女別行動者率（15歳以上）の推移（図1）を見てみる。

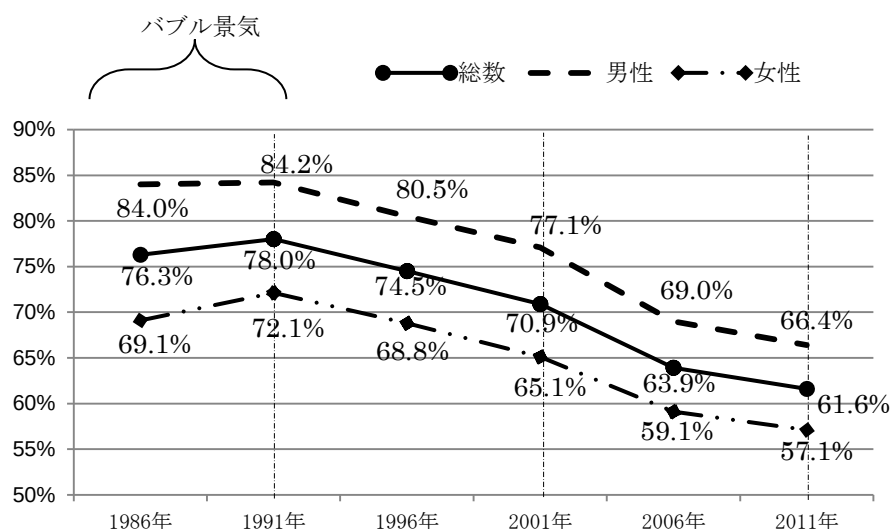


図1 「スポーツ」の男女別行動者率の推移

出所：参考文献（2）より著者作成

バブル期と言われている1986年から1991年までスポーツ参加人口が上昇し、その後一転して下降をし続けている。1991年から2011年までを比べると、男性は17.8%の減少、女性は約15%の減少となっている。この原因を見つけると共に、時代背景を探っていく。

次に、1986年と2011年の年齢階級別行動者率の推移を見してみる（図2）。

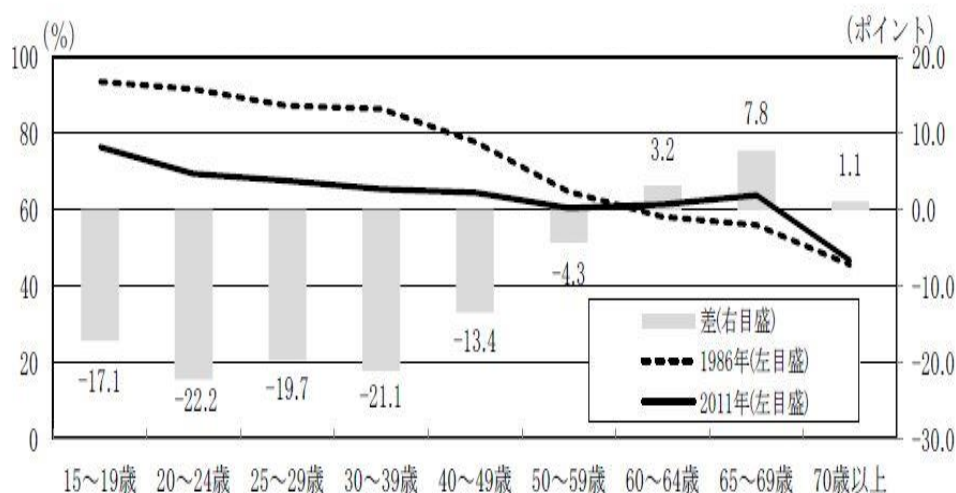


図2 「スポーツ」の年齢別行動者率の推移

出所：参考文献（2）より

年齢階級別スポーツ行動者数を見てみると、健康ブーム指向もあり60歳～69歳で大きく上昇しているが、その逆に60歳未満で大きく低下している。特に15歳～39歳までの若年層のスポーツ離れは顕著に表れており、大きく低下している。

（2）日経平均株価の推移（景気動向）

スポーツの参加人口が落ちだした1986年前後から2012年の時代背景を調べてみた。

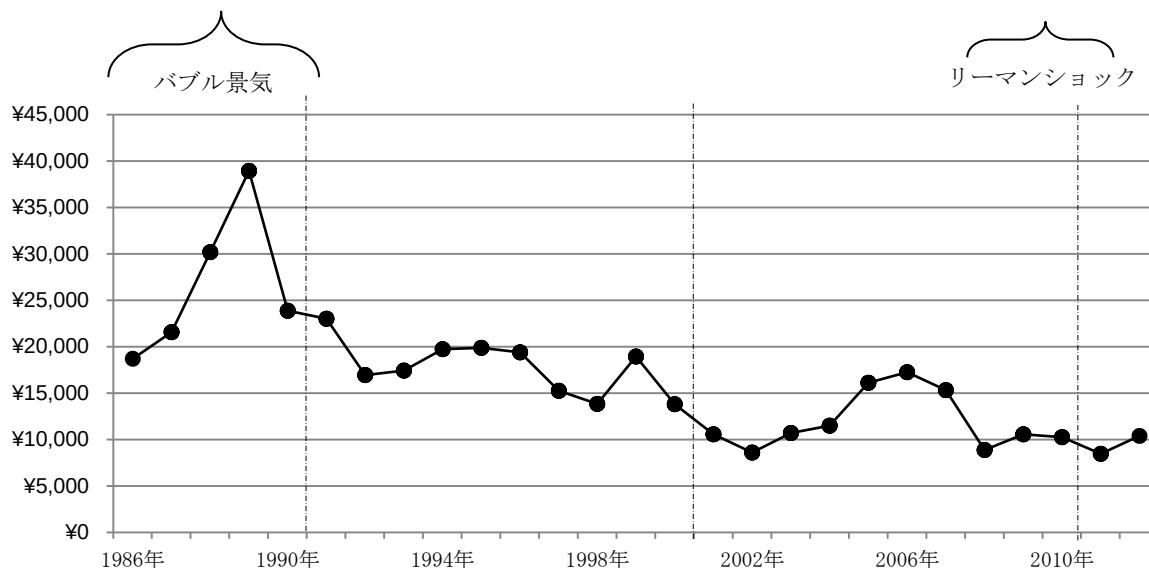


図3 日経平均株価の年度別推移

出所：参考文献（3）より著者作成

図1と見比べてみると、バブル期絶頂の1989年～バブル期終焉の1991年頃（日経平均株価（図3）参照）を境にして、遊びの多様化もあり、いかに若年層がスポーツをしなくなっているかが見えてくる。

（３）携帯電話人口普及率とパソコン世帯普及率

バブル期前後から大きく変わりだした時代背景には、パソコンや携帯電話の普及率が大きく左右していると言える（図４）。

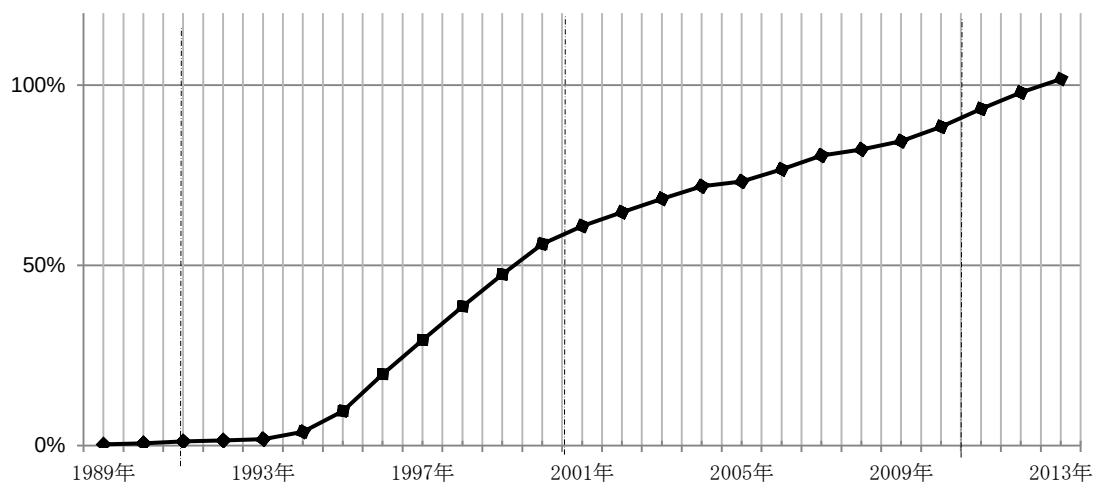


図４ 携帯電話の人口普及率

出所：参考文献（４）より著者作成

携帯電話の普及率は、1989年に DDI セルラー（現 au）が初の小型携帯電話機を発売し始め、1993年に NTT ドコモが初のデジタル方式を発売して一気に爆発した。

続いてパソコン世帯普及率データを見比べてみる。

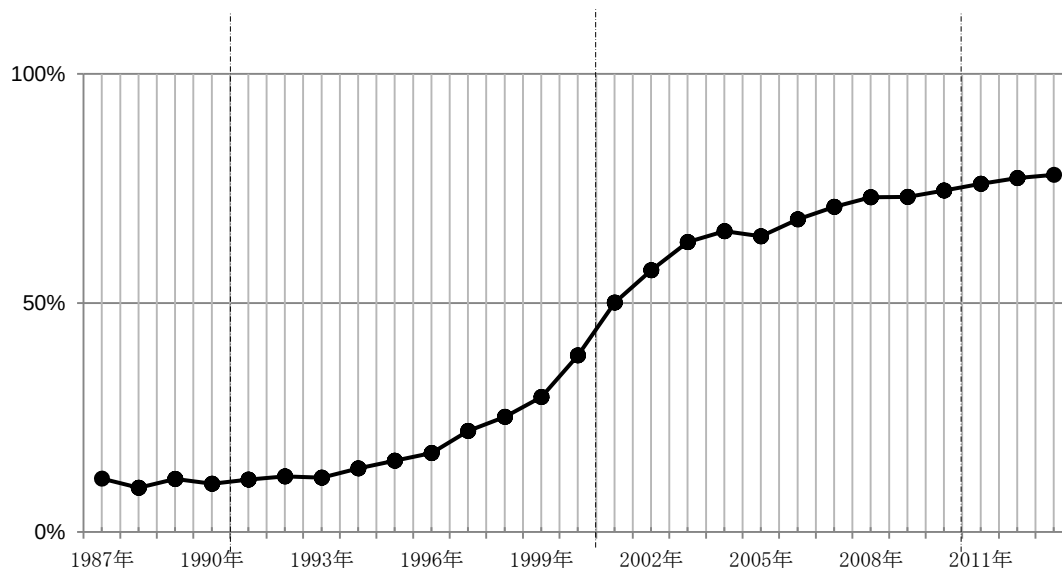


図５ パソコン世帯普及率

出所：参考文献（５）より著者作成

携帯電話の普及率とほぼ同じ曲線を描いている事が分かる。総務省が掲げていた「u-Japan 政策⁽⁶⁾」の中に盛り込まれているユビキタスネット社会の実現に向け着実に IT 化が進んでおり、その実現と共にスポーツ参加人口が明確に減少している現状が見えてきた。

(4) 近年のうつ病患者数の年度別推移

さらに気になるデータを見つけた。

1991年頃より、我が国の大きな社会問題となっている精神疾患のうつ病患者数も急激に増加している（図6）。

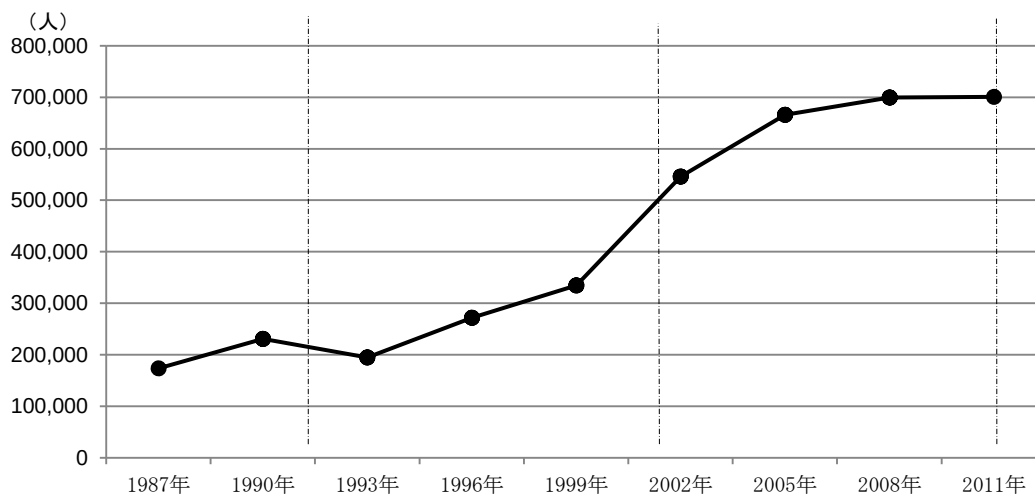


図6 うつ病患者数の年度別推移

出所：参考文献（7）より著者作成

うつ病患者数の推移は、わずか20年の間で実に3.5倍以上の患者数となっている。更にこの数は増加すると予測されている。

(5) 福岡県のうつ病患者数

福岡県のうつ病患者数の現状を分析してみたところ、意外な数字が表れてきた（図7）。

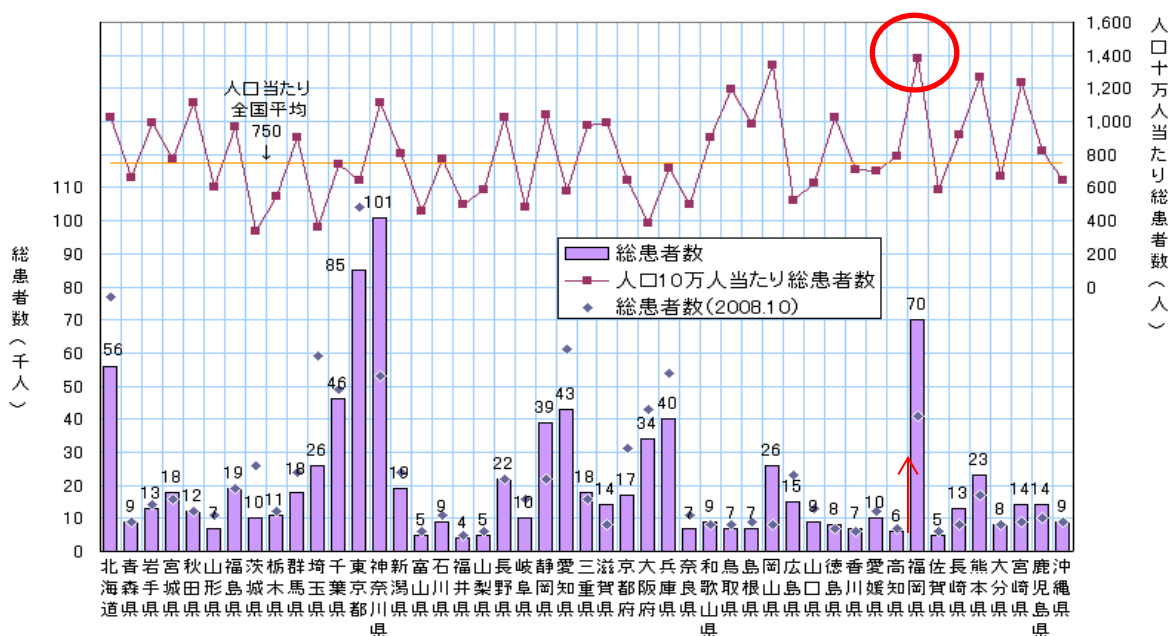


図7 都道府県別うつ病・相うつ病総患者数 (2011年)

出所：参考文献（8）より

人口10万人辺りのうつ病患者数は、福岡県が全国で第一位となっている。
バブル期後半の1990年前半から大きな環境変化が起きており、上記のポイントをまとめてみると、
①1991年以降から、スポーツの参加人口は大幅に減少し続けている。

②1990年代前半から、携帯電話やパソコンの普及率は急上昇している。

③1993年頃から、うつ病患者者数が大幅に増加している。

そこで、一つの仮説が浮かんできた。「スポーツの参加人口の減少は、精神疾患が急激に増えた背景の一つ」ではないだろうか。ここで、スポーツの必要性・重要性が見えてきたのである。

さらに、スポーツ基本法にも盛り込まれているのが「スポーツは心身の健康の保持増進に重要な役割」と言う事である。

心身とは、文字通り心と身体である。スポーツ参加人口が大きく減っていると同時に、うつ病患者が増加している事実で見ると、いかにスポーツが社会の中で必要であるかを考えさせられるデータである。

冒頭にも記載した通り、まちづくりは人づくりである。スポーツは活力ある社会を築き、活気あふれるまちづくりに欠かせないと言えるだろう。また、時間に追われることの多い現代人において、スポーツの参加人口が大幅に低下している今こそ「誰もが、いつでも、手軽に出来るスポーツ」の普及活動が必要である。

ボウリングは上記の条件を全て満たしており、更に、一人でも少人数でも、大人数のチームでもハンデ差なく、天気心配もなく、同時に楽しめるスポーツである。さらに、年間何十万人が来場し多くの笑顔が集まるボウリング場と言う空間は、ボウリングを行うだけのスポーツ施設と言う観点だけではなく、まちづくりの情報発信を実施するためのコミュニティースペースとして活用出来るのだ。

4 スポーツとしてのボウリング

次に、スポーツには、競技スポーツ・生涯スポーツ・健康スポーツと言う三つの観点がある。それぞれ三つの観点の定義を基に、ボウリングを当てはめ掘り下げてみる。

(1) 競技スポーツ

競技スポーツは『人類の創造的な文化活動の一つである』⁽⁹⁾。さらに『自らの能力と技術の限界に挑む活動であると同時に、その優れた成果は、国民に夢と感動を与えるなど、人々のスポーツへの関心を高め、スポーツの振興に資するとともに、活力ある健全な社会の形成にも貢献するもの』と表記されている。競技スポーツから見たボウリングは、日本最大のスポーツイベント「国民体育大会」でも正式種目として認められている（写真1）。

さらに、世界的なスポーツの祭典である2020年東京オリンピック・パラリンピックでは、ボウリングを正式種目に！と言う活動が行われており、世界で107の国と地域が加盟し、オリンピック参加を目指している（写真2）。



写真1 長崎がんばらんば国体ポスター
出所：参考文献（10）より



写真2 2020年東京オリンピック署名資料
出所：参考文献（11）より

日本国内の主なボウラー団体は、以下の通りである。

- ・日本プロボウリング協会（J P B A）
- ・ジャパンレディースボウリングクラブ（J L B C）
- ・（財）全日本ボウリング協会（J B C）
- ・日本ボウラーズ連盟（N B F）
- ・全国実業団ボウリング連盟（A B B F）

また、ボウリングは世界のスポーツであり、世界107カ国の国と地域が加盟している（写真3）。

- ・アメリカ地域（27の国と地域）
- ・アジアボウリング連盟（34の国と地域）
- ・ヨーロッパテンピンボウリング連盟（46の国と地域）

ボウリングは、あらゆる世代にとって身近で、気軽に楽しむことができる環境と印象を持ち合わせた国民的スポーツであると表記されている。



写真3 ボウリングは世界のスポーツ

出所：参考文献（10）より

（2）生涯スポーツ

生涯スポーツの定義とは『その生涯を通じて、健康の保持・増進やレクリエーションを目的に「だれもが、いつでも、どこでも気軽にできる」スポーツであり、都市化・少子化などによって外遊びの機会が減少し、体力が低下している乳幼児・児童から、高齢化社会における生きがいを求める高齢者まで、幅広い年代層を対象とするほか、障害者スポーツもこの範疇である』となっている。「現在、全国のボウリング場では、健康ボウリングと題し様々な教室が行われている。これは外に出るきっかけ作りや異性との出会いに繋がることでの生きがいになり、毎週定期的の時間に出かける事でロコモティブ予防にも大いに役立っている。（株式会社イースタンスポーツ・中野明社長）」



写真4 ボウリングで生涯現役宣言！

出所：参考文献（11）より



写真5 全日本視覚障害者ボウリング

出所：参考文献（12）より

この定義こそ、今まで関わってきたスポーツの中でまさにボウリングが最適であると感じる。その理由として、生涯スポーツとはその名の通り、生涯を通じて継続されることが大前提であるが、ボウリングは子供から高齢者の方まで幅広い世代が、ハンデ差なく一緒になって楽しめるスポーツである。三世代や四世代が共に楽しめるスポーツとなるため、世代間交流にも繋がる。

そして、他のスポーツでは体力の問題・年齢の問題・環境の問題等で生涯を通して行うには困難な場合が多いが、ボウリングではこの様な問題点が無いため、生涯スポーツとして最も適したスポーツと言われている。また、生涯スポーツはその手軽さから、参加人口が多いスポーツと言う事になってくる。世代別と種類別で参加人口の多いスポーツについて調べて行くと、2011年度の1年間に「スポーツ」を行った人は約7,200万人となっている（図8）。

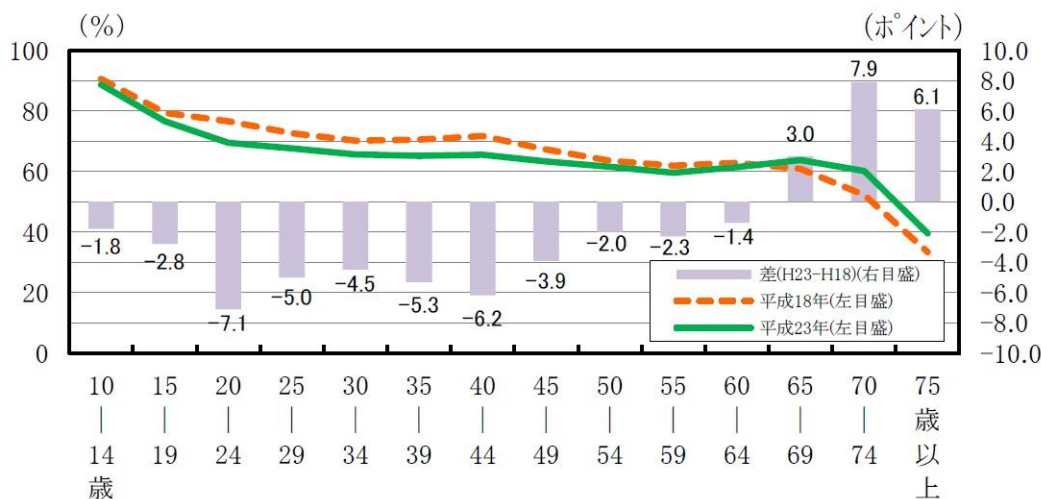


図8 「スポーツ」の年齢階級別行動者率（平成18年、23年）

出所：参考文献（2）より

10歳以上の総人口に占める割合は63%となっており、2006年度より2.3ポイント低下しているが、65歳以上のシニア層は確実に上昇しているというデータが見えてきた。これは少子高齢化に加え、健康に敏感なアクティブシニア層が増えてきたと言う事実である。

その中で、ボウリングの参加人口は年々減少して来ているが、スポーツ参加人口の第1位であるウォーキングの約4000万人に次ぐ第2位となる約1500万人が活動を行っており、まだまだ根強い人気のあるスポーツとなっている（図9）。

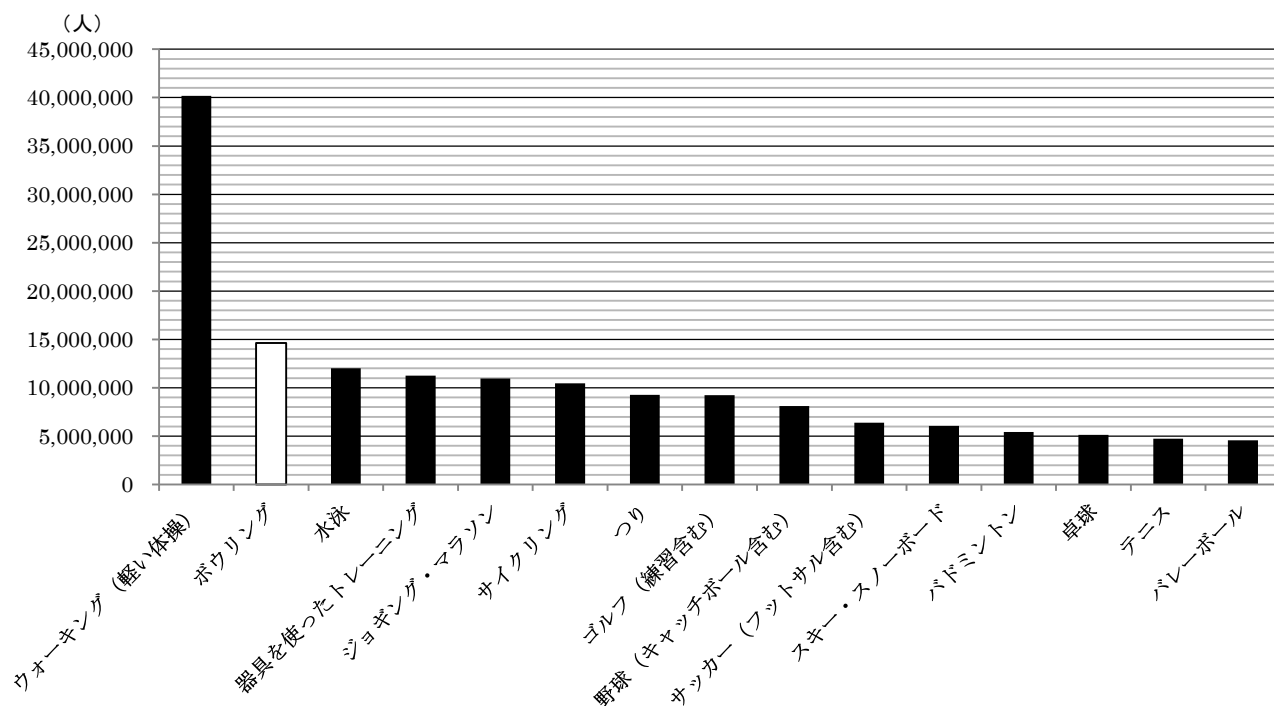


図9 「スポーツ種類別参加者数」

出所：参考文献（2）より著者作成

（3）健康スポーツ

健康スポーツは『心と体に良い影響を与え、継続的に健康を促進するためのスポーツ』である事が不可欠。ボウリングを1ゲーム行った時の消費カロリーは40kcal。ボウリングを3ゲーム（30分）行った時の運動量は、サッカーであれば約18分、ゴルフであれば約33分、バレーボール（平均）では約1時間、散歩であれば約1時間20分同等となる（表1）。

表1 ボウリングの運動量比較

ボウリング3ゲームと他の運動・スポーツとの運動量比較（3ゲーム=30分）			
運動・スポーツ	3ゲーム相当	運動・スポーツ	3ゲーム相当
散歩	80分	ゴルフ	33分
通勤	80分	テニス	20分
掃除	60分	サッカー	18分
バレーボール（平均）	60分	ラグビー	12分
野球（チーム平均）	45分	マラソン	7.5分
キャッチボール	40分	水泳	2.5分

出所：参考文献（13）より

現在、多くのボウリング場では、中高年の健康増進策の一環としてボウリング教室を開催している。毎週定時になると開催される教室は、上達目的だけのためでなく、運動不足やコミュニケーション不足の解消、更にはロコモティブシンドローム予防にも大いに貢献していると言える。

指導においてはプロボウラーや専門のインストラクターが付いて行っている。無理な力を入れずに投げたボールでピンが全て飛び散れば、自然にストレス解消にもなるであろう。

若年層のスポーツ離れが健康障害やコミュニケーション不足の引き金となり、うつ病や躁うつ病の発症を増加させている原因が見えている限り、誰もが気軽に出来て、コミュニケーションの取りやすいボウリングは、非常に健康的なスポーツである事が言える。

5 ボウリング業界の歴史と現状

(1) 参加人口

レジャー白書2013年によれば、ボウリングの参加人口推移として次の内容を表すことができる。

表2 ボウリング参加人口の推移（15歳以上）

単位：万人

年度	参加人口数	増減数	前年比
H05年度	4,011	—	
H10年度	3,749	▲262	93.5%
H15年度	3,182	▲567	84.8%
H20年度	2,508	▲674	78.8%
H25年度	1,449	▲1,059	57.7%

出所：参考文献（14）より

わずか20年の間（平成5年と平成25年）を比べると、3分の1以下2500万人以上のファン離れが起きている。特に平成20年～25年の5年間の落ち幅が著しく、約1059万人が激減した。ボウリング業界は景気後退期に大きな落ち込みを見せ、新規取り込みを仕切らずに斜陽産業化している。続いて、ボウリングにおける過去25年間の年齢階級別行動者率の推移を見てみる（図10）。

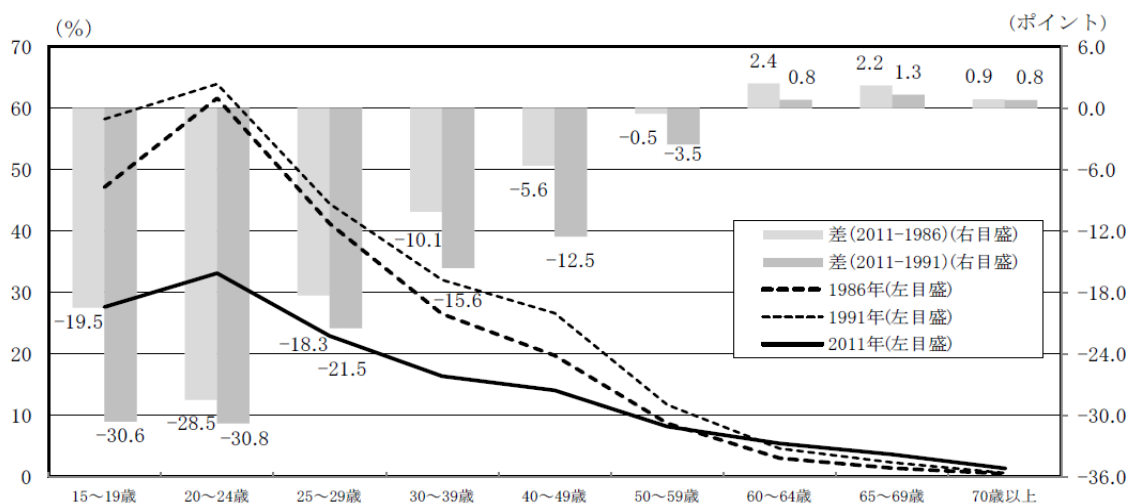


図10 年齢階級別ボウリングの行動者数（1986年、1991年、2011年）

出所：参考文献（2）より

ボウリングの行動者数で1991年と2011年を見比べてみると、15歳～24歳で30ポイント以上低下している事が分かる。若年層のコミュニケーション能力不足が叫ばれている昨年『手軽に、いつでも、

誰でも楽しめるスポーツであるボウリング』をきっかけにしたイベントは若者の交流会にも効果的であると言えるだろう。

(2) ボウリング場数

2013年8月現在でのボウリング場は905センターとなっている。空前のボウリングブームを巻き起こした1970年代前半からの経緯を追ってみる（図11）。

ボウリングの最新データにあるように、ボウリング場の数は1970年代に開発されたスコアをオートに計算出来る【コンピュータボウリング】の販売を機に一気に大ブレイクした。そして、1972年には過去最大の3,697センターとなり大ブームを巻き起こす。しかし、1973年の【オイルショック】を境に、わずか4年で4分の1まで減少。大打撃を受けた様子が数値で出ている。

その後、微増～微減を繰り返し、2006年を境に減少を続けている。最近では、ファン獲得のためにシニア層へのアプローチ強化へと向き始め、様々なボウリング場で健康ボウリング教室が開催されており、そこからボウリング場売上の基礎となるリーグ化へと繋がられている。

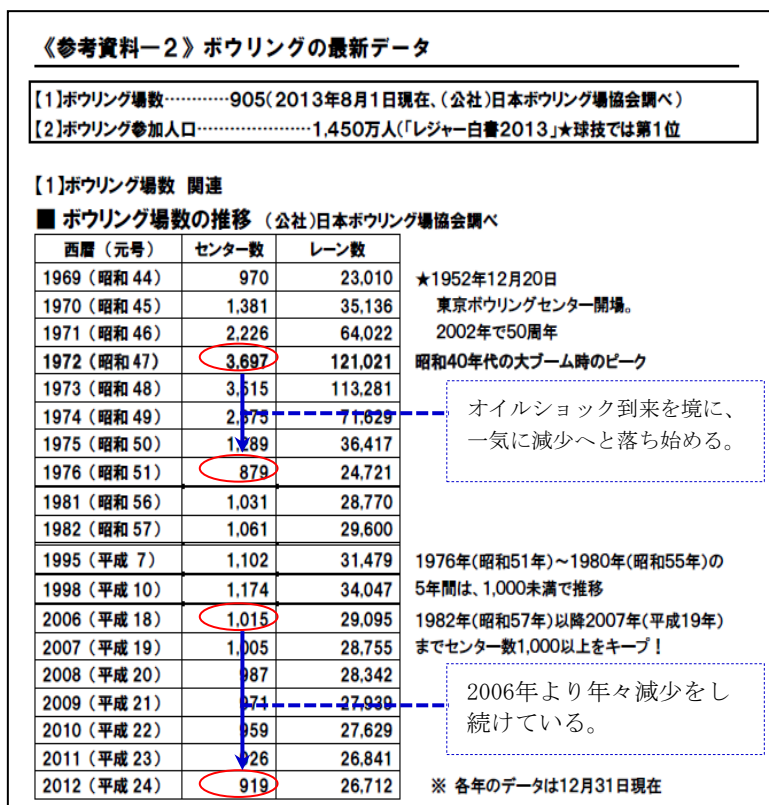


図11 ボウリング数の推移

出所：参考文献（15）より

(3) 福岡市内のボウリング場

福岡市には平成27年1月現在、12施設ものボウリング場がある。

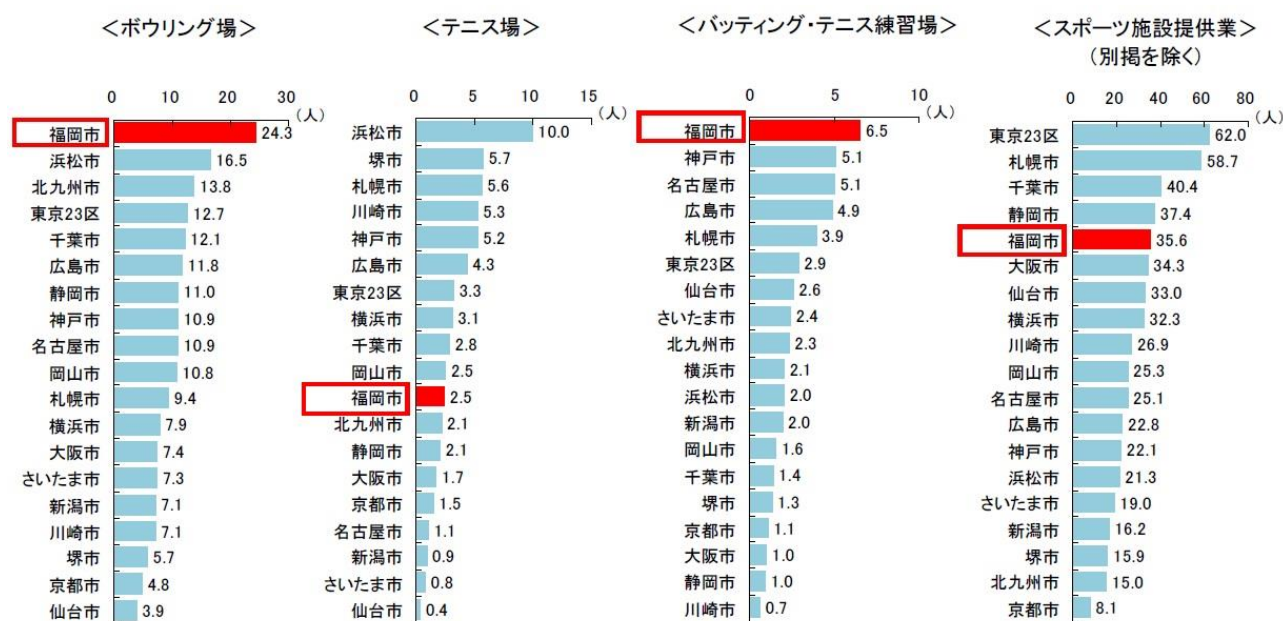
福岡市内のボウリング場
12センター（人口約150万人）
非常に多くのボウリング場がある



図12 福岡市内のボウリング場

出所：YahooMap より、著者作成

福岡市内は人口に対するボウリング場数は全国でも上位に位置しており、非常に多くのボウリング場があると言われている。更に福岡市のボウリング場は、人口10万人辺りの従業者数では日本一の24.3人が従事している。



資料：平成21年経済センサス基礎調査

図 1 3 福岡市内のボウリング場従業者数

出所：参考文献（16）より

大都市比較で見ると、福岡市におけるボウリング場の役割は雇用面でも大きな役割を持っていると感じる。

6 ボウリング場が行っているまちづくり成功事例

他地域が行っているボウリング場を活用したまちづくり例を紹介したい。

（1）愛知県名古屋市 星ヶ丘ボウル様での取り組み

星ヶ丘ボウルでは、毎年開催されている「星ヶ丘学区 納涼盆おどり大会」が地域のまちづくりとして高く評価されている。星ヶ丘ボウルの駐車場を開放し、地域夏祭りの風物詩として認知されており、約40年間続いている。「このイベントは、毎年楽しみにしている住民の方も多く、3世代の方も通ってくれている。2014年度来場者数約2,000名を数えた。（西野支配人）」



写真 6 星ヶ丘ボウル外観

出所：参考文献（17）より

EVENT

第40回 星ヶ丘学区 納涼盆おどり大会



開催日 7/26(sat)・27(sun)

場所 第2星ヶ丘駐車場
(星ヶ丘ボウル隣接)屋上

時間 18:00～21:00

駐車場の屋上にやぐらと屋台が出現！
夏の風物詩を味わって。

主催／星ヶ丘学区連絡協議会
協賛／星ヶ丘商店街振興組合・青少年育成協議会



写真7 第40回 星ヶ丘学区 納涼盆おどり大会

出所：参考文献(17)より

更に、2008年より始まり、2009年から年に2回開催されている「キッズフリーマーケット」は、売るのも買うのも子供たちだけで行う大人気イベントである。

星ヶ丘ボウル

子ども満足度200%

キッズフリマ

2014.7/21(月祝)13:00～15:00

場所:星ヶ丘ボウル 卓球コート

夏休み廃ビン工作

お家でも簡単にできるビン工作のアイデアを先生から学び、実際に工作して遊ぶことができます!!

お買い物体験!!

お家でも簡単にできるお買い物体験!!

お店屋さん募集中!!

お家でも簡単にできるお店屋さん募集中!!

星ヶ丘ボウル

キッズフリマ

お店屋さん大募集!!

2014.7/21(月祝)13:00～15:00

募集要項

①対象年齢 小学生以上(小学生は保護者同伴で参加可)

②参加費 小学生以上は参加費が無料です。小学生以下は参加費が500円です。

③お申し込み 7月12日(土)10:00～11:00までお申し込みください。

④お申し込み方法 ①お申し込み用紙をダウンロードし、お申し込みください。②お申し込み用紙に必要事項を記入し、お申し込みください。

⑤お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑥お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑦お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑧お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑨お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑩お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑪お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑫お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑬お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑭お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑮お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑯お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑰お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑱お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑲お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

⑳お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉑お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉒お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉓お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉔お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉕お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉖お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉗お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉘お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉙お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉚お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉛お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉜お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉝お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉞お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㉟お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊱お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊲お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊳お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊴お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊵お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊶お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊷お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊸お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊹お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

㊺お申し込み先 星ヶ丘学区連絡協議会 青少年育成協議会

星ヶ丘ボウル 問合せ 0120-100-489 FAX/052-781-5663 E-Mail/bowl@hoshigaka.co.jp

星ヶ丘ボウル 問合せ 0120-100-489 FAX/052-781-5663 E-Mail/bowl@hoshigaka.co.jp

写真8 星ヶ丘ボウル キッズフリマ

出所：参考文献(17)より

キッズフリーマーケットは2008年から2014年までの間で、出店数約408店舗・出店人数は約1,000名を超えている。

（２）茨城県土浦市 大学ボウル様での取組み

大学ボウルでは、ボウリング教室に通って来られた卒業生を定期的に集めて大同窓会を開催し、食事会や音楽コンサートを行っている。大同窓会の参加者からは「ボウリング教室で繋がった縁だから話も合うし、仲間とのコミュニケーションも取れて凄く楽しい！ずっと続けて欲しい。と言う声が多数出ています（国本美加社長）」との事である。



写真9 大学ボウル外観

出所：参考文献（18）より



写真10 大学ボウルの名物社長国本美加社長と同窓会の様子

出所：参考文献（18）より

更に、ここ数年のでは、筑波大学と提携し、4日間のボウリング集中授業を行っている。



写真11 筑波大学が行っている4日間のボウリング集中授業

出所：参考文献（18）より

ボウリングの歴史や、スポーツボウリングの基礎をプロから実際に学んでいる。

（３）福岡県飯塚市 麻生塾ボウル様での取組み

麻生塾ボウルでは、飯塚高校と連携しスポーツコース授業を一年に一回行っている。授業内容は「主に、ルールやマナーの指導から、実技ではフックボールのメカニズム解説や実践を習って貰っている。（岩永支配人）」

現在８年ほど継続して行われており、ゴルフも実施している。



写真12 麻生塾ボウル外観

出所：参考文献（19）より



写真13 飯塚高校スポーツコース授業風景

出所：参考文献（19）より

7 南区大橋地区での取組み（ボウリング場＝大橋シティボウル）



写真14 大橋シティボウル外観

出所：参考文献（20）より

現在、私が従事している福岡市南区にある大橋シティボウルでも、地元商店街等の繋がりから、様々な街づくり活動を行ってきた。
全てのキーワードは「ボウリング場から笑顔になるまちづくり」である。その実例を踏まえ、目的と共にここで紹介したい。

(1) おたくボウリングの実施

きっかけは「コスプレイヤーの居場所を作りたい」という依頼があったことと「コスプレイヤーの仲間は、ひきこもりがちの子たちも多い。更に会社員や大学に通う留学生までと幅広い」こと。目的は「日本のサブカルチャー文化を取り入れたボウリングパーティー等の実施での仲間作り」であること。

内容は「お気に入りのアニソンを聞きながらコスプレイヤーとアニメファンが入り交じり、歌と踊り、そしてボウリングをみんなで投げて繋がって貰う」設定である。



写真15 おたくボウリング I N大橋シティボウル (2014年8月)

出所：参考文献 (20) より

おたくボウリングは2013年に始まり、約1年半の間で過去7回開催、総勢400名以上の来場者があった。さらに、2014年度に入ってから予約の時点で開催数週間前に満席となっていた。そこで、おたくボウリングとコスプレイベントを大橋商店街のまちづくりとして活用できないか？という提案を大橋商店街の渡邊副会長と模索し、2014年11月に「大橋ハロウィンフェス」として実施した。



写真16 大橋ハロウィンフェス I N大橋商店街 (2014年11月)

出所：参考文献 (21) より

このまちづくりイベントは総勢3,000名以上の集客に繋がり、大橋のまちが盛り上がった大イベントとなって大成功を遂げ、2015年10月にも第二回目の開催が決定している。まさにボウリング場を活用したまちづくりの成功事例である。

(2) 芸術の街・大橋 縁起物プロジェクト

きっかけは2014年9月、大橋を活動拠点にしている株式会社クリアステージの赤坂社長より「同級生のイラストレーターがいるが、発表の場を何か設けられないだろうか？」であった。そこで、大橋の特性を活かし、地域活性に繋げるために二つの目的を掲げた。その目的は「大橋のまちづくりに繋げるためと、将来像としてアートとビジネスを接点にすること」である。

内容は「文化向上、人材育成、付加価値、観光産業」へと繋げる事であり、「話題性を持たせる為に日本人が大好きな縁起物をアートにする」と言う流れである。

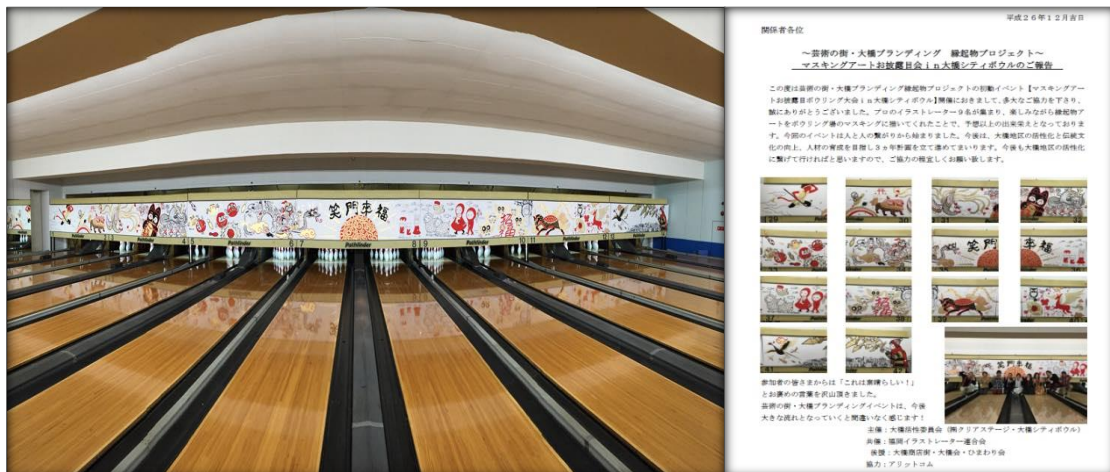


写真17 縁起物マスキングアート I N大橋シティボウル6階

出所：参考文献 (20) より

今回、第一弾と第二弾をボウリング場を活用して始めさせて頂いた。第一弾は、2014年11月、福岡市を中心に活動している総勢9名ものプロのイラストレーターが集まり、ボウリング場のマスキングと言う面を活用して「縁起物マスキングアートの作成」を行った。作成途中で特に印象深かったのが、プロがみんな楽しんで作品を仕上げていた事である。遊び心が満載で、アートの中には隠れボウリングピンも書かれている。

続いて第二弾は、2015年2月、ボウリング場で廃棄されるだけの廃ピンを活用して「縁起物廃ピンアート」を作成した。前回とは少しメンバーも変わり、プロのイラストレーターだけでなく、木工作家や主婦も加わって16名もの参加者が集まり、作品に特徴が出ているのが印象的であった。



写真18 縁起物廃ピンアート I N大橋シティボウル

出所：参考文献 (20) より

廃ピンアートは様々な特徴がある33本もの縁起物廃ピンアート作品が集まった。本物の縁起物廃ピンアートにする為に、大橋シティボウル裏にある熊野道祖神社にて魂入れのご祈祷を行った。今後は、大橋商店街と熊野道祖神社も巻き込んだ大橋地域全体でのイベントへ繋げて行く予定である。

8 福岡市への提言として

「スポーツを生かしたまちづくり」というテーマの中、自分なりのテーマである「ボウリング場を活用したまちづくり」の研究を続けてきたが、やはりスポーツの持つべき必要性・重要性は福岡市民だけの問題ではなく、日本国民の【心と身体健康作り】であると感じる。そして今回のテーマを考えると、「ボウリング場を活用したまちづくり」のテーマで、福岡市への提言には以下の3点を抜きには語れないのではないだろうか。

- ①スポーツの持つ力
- ②地域の人づくり
- ③居場所作り

その中で私は、以下の3つの提言をさせて頂きたい。

(1) 義務教育の体育授業としてのボウリング場を活用したまちづくり

ポイントは、チームワーク・戦略形成・経験である。

体育授業の一環として活用する事で、以下の効果が見られると感じる。

- ①スポーツ講義：ボウリングの歴史やプロスポーツとしてのルール・マナーの受講
- ②マシンルームの見学：バックヤード体験
- ③ボウリング競技のチーム戦：チームワークの形成や戦略作りが可能

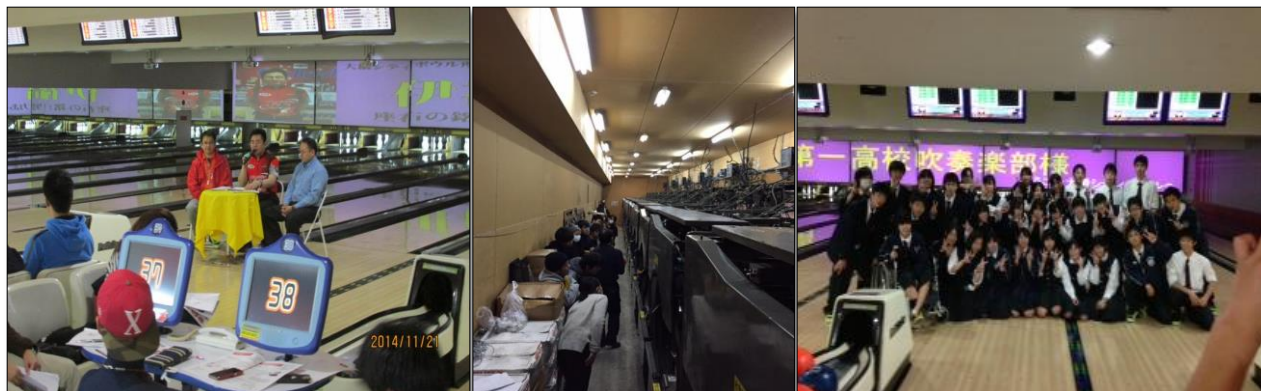


写真19 大橋シティボウルイベント写真

出所：参考文献(20)より著者作成

過去、大橋シティボウルで行った実績(ボウリングの歴史やスポーツボウリングのルールやマナー、ボウリングイベントの考え方等)を基に、義務教育世代(小中学生)を対象にした体育授業としてボウリング場を活用して頂きたい。

ボウリングは身近な成功体験の場でもあり、どんな生徒でも大きなハンデ差なく楽しめる。さらには、天候にも左右されない上に、仲間と共に笑顔で楽しめるスポーツでもあるからだ。

(2) 福岡市内の各公民館対抗家族ペアボウリング大会

ポイントは、市民間や世代間交流・公民館の活用である。まちづくりは人づくりである。IT化による情報化社会の到来やSNSの発達等により繋がる機会が多くなってはいるが、人間関係が希薄化していると言う理不尽さも兼ね備えている。

そこでまずは、身近な家族がペアになりボウリングを楽しんでもらいながら、共に感動共有の空間を体験して貰う事が大切であると考えている。

さらに、公民館ネットワークを基に、繋がる事が出来るスポーツボウリングをイベントにして、イベント最中に撮った家族笑顔写真を公民館に掲示して、公民館にも足を運んでもらう。



写真20 大橋シティボウル親子ボウリングイベント写真

出所：参考文献（20）より著者作成

（3）留学生交流・おたくボウリングパーティー

ポイントは、国際交流・文化交流・居場所作りである。日本のアニメ文化を取り入れたおたくボウリング等の実施により、留学生や若者との国際交流文化が生まれ、おたく文化で新しいコミュニティ形成の場にも繋がる。留学生同士でもコミュニケーション不足と言われる中、おたくやアニメと言うキーワードは、国境も世代も越えて共通の話題となる得るのではないだろうか。

さらに、SNSや動画コンテンツ等を活用する事により、福岡の発信力の原動にもなり観光産業へと導いていく事も可能であると感じる。



写真21 おたくボウリングIN大橋シティボウル

出所：参考文献（20）より著者作成

9 最後に

平成26年度福岡市民研究員研究テーマ「スポーツを生かしたまちづくり」について「ボウリング場を活用したまちづくり」を研究として行って来た訳だが、ココで改めて共に活動が続けてきた市民研究員の仲間である森満美枝氏と古川富美子氏並びに、この研究活動を支えて下さった公益財団法人福岡アジア都市研究所職員の柳基憲氏と中村由美氏には心よりお礼を申し上げたい。

そして、この研究を応援して下さいだったスポーツガーデン株式会社の高橋社長始め、今回の研究活動のきっかけを下さった九州共立大学の森部昌広先生と森部ゼミ生一同、大橋地区を盛り上げようと言う事で力を合わせて下さっている大橋商店街の東会長と渡邊副会長並びに大橋会の高井英子会長と赤坂智弘社長そしてイラストレーターの竹中俊裕氏とよしもとりえ氏、更に株式会社ダイガクコーポレーション（大学ボウル）の国本美加社長、株式会社イースタンスポーツ（スターレーン）の中野明社長、星ヶ丘ボウルの西野支配人、麻生塾ボウルの岩永光博支配人他、活動で繋がった方々にも心からお礼を伝えたい。

最後になるが、2014年4月から12月までの約9ヵ月間、北九州市にある九州共立大学経済学部 経済経営学科スポーツビジネスコース森部ゼミが行ってきた活動報告も素晴らしいので、ココで報告させて頂きたい。



写真22 九州共立大学 スポーツビジネスコース森部ゼミ主催チャリティーボウリング

出所：参考文献（22）より著者作成

「社会に出る前に、少しでも学生たちに社会経験を積ませたい」と言う九州共立大学経済学部 経済経営学科特別客員准教授でスポーツビジネスコース主任の森部昌広先生の思いに同調。森部ゼミ生たちが考えた「自分たちの活動で地域の子どもたちにクリスマスプレゼントを渡したい」と言う

目的で、森部ゼミ生の上米良悠太くんをリーダーに抜擢したボウリングチャリティーイベントを共に企画した。

学生による社会貢献活動×ボウリングイベントの数か月に及ぶプロジェクトが始まったのだ。共に活動する事で、学生たちの熱い思いを感じる事が出来たが、簡単には進まない。彼らは、学生だから何とか協力してくれるだろうと言う甘い思いが一瞬で消え去っていた。協賛を頂くために300軒以上の企業リストを作成し、その中で社会貢献事業を行っている企業リストを100軒以上絞り込み営業活動を行う。営業の厳しさや社会の厳しさ、集客の難しさを痛感している。「自分たちのアイデアで、子どもたちにプレゼントを渡したい！」と言う思いが背中を押していたと言う。

様々な困難を乗り越え2014年12月、九州共立大学近隣の幼稚園や保育園の子どもたちにプレゼントを渡すことが出来た。子どもたちからは「サンタさんありがとう！お兄ちゃんありがとう！！」と言う最高のご褒美を頂いたことで「本当にやって良かった」との報告を受けている。

福岡市民の笑顔が1人でも増えるために、明るいまちづくりのために、スポーツの力は必要である事は間違いない。そこで、今、何をやらなければいけないのか、だけではなく、未来に何を残せるのか、と言う考え方も必要に感じる。

私見であるが、最も重要な事は、研究報告から読み手や聞き手が具体的な可能性をイメージ出来るかどうかあり、行動に対してワクワクするかどうかではないだろうか。

私はこれからも福岡市に住んでいく限り、真剣に街の事を考えてみたい。だからこそ、自分が出来る限りの力で、ボウリング場を活用したまちづくりに力を注ぎ、福岡市民の笑顔を本気で増やしたいと考えている。

〈参考文献〉

- (1) 文部科学省：『スポーツ基本法（平成23年法律第78号）（条文）』
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm 2015. 2
- (2) 総務省統計局：『統計からみたスポーツの今昔 - 体育の日』にちなんで-』
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi640.htm> 2015. 2
- (3) 世界経済のネタ帳：『日経平均株価の推移（年次）』
<http://ecodb.net/stock/nikkei.html> 2015. 2
- (4) 総務省統計資料：『移動体通信（携帯電話・PHS）の年度別人口普及率と契約者数の推移』
http://www.soumu.go.jp/soutsu/tokai/tool/tokeisiryo/idoutai_nenbetu.html 2015. 2
- (5) 総務省情報通信政策局：『通信利用動向調査報告書世帯編』
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html> 2015. 2
- (6) 総務省：『u-J a p a n政策』
http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/ict/u-japan/ 2015. 2
- (7) 厚生労働省：『平成23年患者調査（傷病分類編）』
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/10syoubuho/> 2015. 2
- (8) 社会実情データ図録：『都道府県別うつ病・躁うつ病患者数（2011年10月）』
<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/2155.html> 2015. 2
- (9) 文部科学省：『競技スポーツ振興の意義』
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/athletic/070817/001.htm 2015. 2
- (10) 全国ボウリング公認競技場協議会：『長崎国体ポスター（モデル：今井双葉）』
<http://www.jarba1.com/tayor102-3.html> 2015. 2
- (11) 公益財団法人全日本ボウリング協会
http://www.jbc-bowling.or.jp/info_jbcnews.html 2015. 2
- (12) 全日本視覚障害者ボウリング協会（BBCJ）
<http://www.bbcj.org/hpl/> 2015. 2
- (13) 東京教育大学・豊田スポーツ医学研究室より資料提供
- (14) 公益財団法人日本生産性本部：『レジャー白書2013 - やめる理由・始める理由 余暇の道筋 - 』, 2013. 8
- (15) 公益社団法人日本ボウリング場協会 広報資料
<http://www.bowling.or.jp/> 2015. 2
- (16) 総務省統計局：『平成21年経済センサス基礎調査』
<http://www.stat.go.jp/data/e-census/2009/> 2015. 2
- (17) 星ヶ丘ボウルホームページ
<http://www.hoshigaoka.co.jp/bowl/> 2015. 2
- (18) 大学ボウルホームページ
<http://www.daigaku-bowl.com/tsuchiura/> 2015. 2

- (19) 麻生塾ボウルホームページ
<http://www.aso-group.co.jp/kaihatu/bowl/> 2015.2
- (20) 大橋シティボウルホームページ及びFacebook
<http://ohashicitybowl.com/> 2015.2
<https://www.facebook.com/ohashicitybowl> 2015.2
- (21) 福岡市南区ホームページ内, 楽しかおおはし (大橋駅前活性化事業)
<http://www.city.fukuoka.lg.jp/minamiku/k-shinko/charm-event/oohasikasseika.html> 2015.2
- (22) 九州共立大学経済学部 経済経営学科 スポーツビジネスコース 森部ゼミ
<http://moribejukuchou.com/> 2015.2

ささえるスポーツと学生 ースポーツボランティア活動参加に関する研究ー

市民研究員 古川 富美子

1 研究の背景と目的

少子高齢化や人口減少、ライフスタイルの多様化が進んだことで地域活動の担い手不足等、地域活動の継続への懸念がある。実際に地域活動に参加するきっかけも特になく、地域でつながりあうことの重要性を感じているもののどのようにして参加して良いかもわからない人も少なくないと思う。私自身、自分の住んでいる地域の活動に参加をするにもどのように参加したらよいかわからない。

福岡市には、ソフトバンクホークスやアビスパ福岡等のプロスポーツチーム、ラグビーや陸上などの実業団スポーツチームも多数あり、国際的なスポーツイベントも多く開催されている。そして、「みるスポーツ」の機会に対する総合評価も高い⁽¹⁾。また、福岡市は、大都市でありながら山や海が比較的都心に近く、自然のなかでマリンスポーツや野外活動、ジョギングなど様々な種類のスポーツに親しむことができる。働く場所と住む場所も近く、移動距離が短いため余暇に時間を取りやすいことや特定健康診査や特定保健指導が始まったことも契機となって生活習慣病予防、運動習慣の重要性が高まったこともあり、「するスポーツ」への関心が高まっている⁽²⁾。

一方、「ささえるスポーツ」についてはどうだろうか。1995年の阪神・淡路大震災以降、日本において「ボランティア」が注目され「する」「見る」以外のスポーツとの関わり方「ささえる」ということに楽しさややりがいを感じる人が増えている。しかし、「スポーツボランティア」について、あまり活発ではなく、福岡市で行われていた「スポーツボランティア登録」は、年々増加していたものの現在では、行われていない。

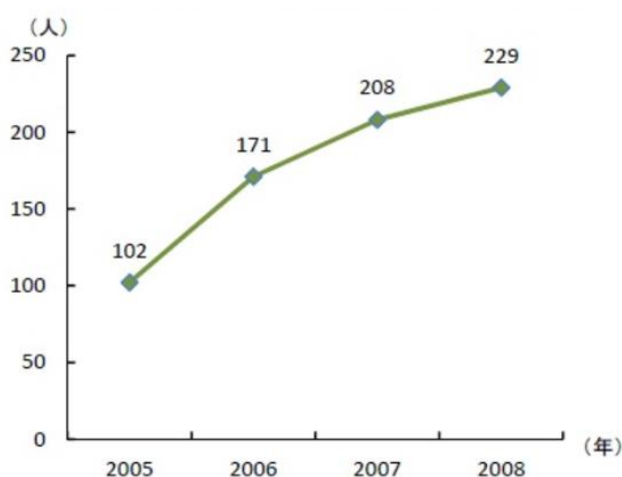


図1 福岡市のスポーツボランティア登録者数

出所：福岡市市民局スポーツ振興課「福岡市スポーツ振興計画」平成22年2月
(財)福岡市スポーツ振興事業団集計による
(注)各年度末の登録者数

本研究は、福岡市において大学生のスポーツボランティア参加がどのような価値を持つものなのか、スポーツボランティアについて調査しどのような仕組みづくりを行っていくべきかを仮説として提言していくことが目的である。

ところで、本研究における「スポーツボランティア」という言葉について定義を行っておく。文部科学省では、「地域におけるスポーツ団体において、報酬を目的としないでクラブや団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ活動などにおいて、専門能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支えるひとのこと」と定義している。スポーツボランティアを議論する際に「交通費」程度が支給される点について、また、地域のスポーツイベントで実際に「交通費」が支給される点について議論されることが多い。しかし、「報酬を目的としない」という点に着目し、本研究ではこの定義を用いている。むしろ、最近のスポーツイベントでは、交通費も支給されないことの方が多い。現に2014年に開催された福岡マラソンでは、事前の研修・当日の活動現場までの交通費は、自費であった。

2 スポーツと地域活性化について

スポーツは、わが国においては、明治期以降、心身を鍛える「体育」という目的で学校教育に取り入れられて行われてきた。戦後、国民体育大会などイベントが戦後復興のインフラ整備や波及効果による経済の活性化という目的があったものの地域の活性化とは関係がなかった。2009年9月に公表された「スポーツ振興基本計画」においても、「総論 1. スポーツの意義」のなかで、「スポーツは人間を豊かにし、充実したものとするとともに、人間の身体的・精神的な欲求に答える世界共通の人類の文化のひとつである」として、以下のように書かれている。

スポーツは、社会的に次のような意義を持つ

- i. 青少年の心身の健全な促進を促すものであり、仲間等の交流を通じて青少年のコミュニケーション能力を育成し、豊かな心と他人に対する思いやりを育むとともに、多様な価値観を認め合う機会を与える
- ii. 住民相互の新たな連携を促進するとともに、地域の一体感や活力が醸成され、地域における連帯感の醸成に資する。
- iii. スポーツ産業の広がりと共に伴う雇用創出等の経済効果を生むとともに、国民の心身両面の健康の保持促進に貢献し、医療費削減効果など、国民経済に寄与する
- iv. 世界共通の文化の一つあり、世界の人々との相互の理解や認識を深めることができるなど、国際的な友好と親善に資する。

『スポーツ振興基本計画』より抜粋

このように経済的な効果だけでなく社会的な効果も期待されており、1991年に発足したJリーグでもその理念のなかで、「地域との連携」を謳い、また、発足から「企業」として活動していたプロ野球チームも近年地域との関わりを強くしている。そして、スポーツには、住民交流・地域活動参加の「きっかけ」としての役割も期待されている。

3 実態と課題

（１）福岡市における地域活動への参加について

地域活動に「よく参加している」だけでなく「時々参加している」「あまり参加したことがない」を合わせても50%前後にとどまっている。

自治会に加入するメリットとしては、お祭りなどのイベントを通して、地域の人たちと交流を深めることができる、防犯訓練やパトロールなどの活動を通じ地域における災害の備えを講じることなどなどメリットがあるものの、自治会の加入している割合が最も多いのは、60代女性で、次いで50代・70代女性で、70代男性と続き、いずれも80%を超えている。最も少ないのは、20代女性の44.5%だった⁽¹⁾。

一方、子供会の加入率は、政令指定都市の中で最も高い。これは、地域活動に参加をするきっかけがあれば、地域活動に参加できると考えてよいのではないだろうか。自治会の加入率が上がると地域課題が解決するというわけではないが、きっかけがあり、様々な地域活動があることを知り、いざというときに参加することを選ぶことができるようになることが大切だと考える。

年	(%)
2005(H17) N=1,779	49.0
2010(H22) N=554	56.2
2012(H24) N=661	54.5
2013(H25) N=2,290	52.0

図2 地域活動への参加率

出所：福岡市「第9次福岡市基本計画の成果指標に関する意識調査」

注：住んでいる地域で過去2年間の地域活動（住民が主体となって行っている活動）参加経験について、「よく参加している」、「時々参加している」、「あまり参加したことがない」に回答した割合の合計

（2）大学生について

福岡市は、人口に占める大学生の割合が東京・京都につぐ3位⁽⁴⁾、人口に占める若者率（15歳～29歳の割合）が、政令指定都市で1位である。若者、大学生は、まちづくりを進めていくうえで貴重な資源であり、福岡市は、平成26年度主要施策において「大学のまち」づくりを推進している。大学生期だけでなく、大学卒業して地域活動を行なっていく予備軍として考えた時に地域活動を大学生期に経験しておくことでハードルが低くなり、今後も参加する意欲がでるのではと考える。大学生の地域活動への参加については、先程示したように20代の自治会加入率が低い現状もあり、また、学生時代のボランティア活動は、身近なものとなっており、教育的効果についても期待されている。授業で学んだ知識や技術を実践的に展開することができることや専門学習への動機づけとなり、理解が促進されること、また市民的責任性や利他的意識を向上させることができる⁽⁵⁾。

（3）ささえるスポーツの実態について

年代別に見ると10代のなかでは大学期が1番多く17.8%だが、全体的に見ると7～8%となっており、約800万人がスポーツボランティアに参加している。

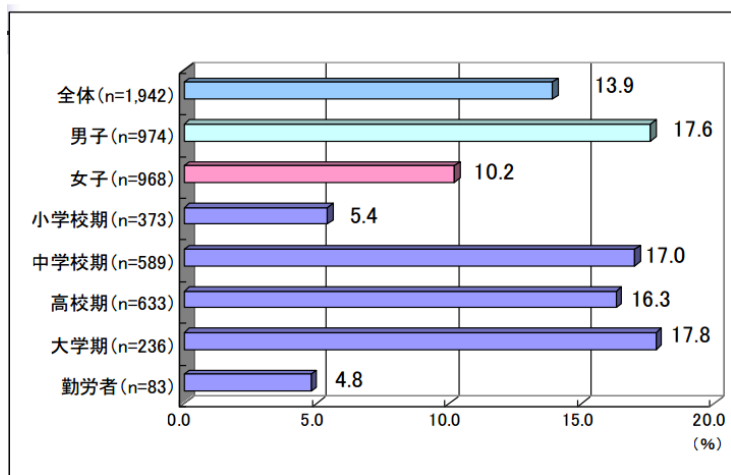


図3 10代のスポーツボランティア実施率

出所：笹川スポーツ財団「10代スポーツラインに関する調査」2012

しかしながら、スポーツボランティアの実施希望率は14.2%あり、スポーツボランティアの実施率の約2倍となっていることから潜在的なスポーツボランティアは多く存在していることが考えられる。(SSF 笹川スポーツ財団, 2006)

ボランティアの活動内容としては、「地域のスポーツ大会・イベントの運営や世話」が実施率・希望率とも最も高く、「日常的な団体・クラブの運営や世話」と続いている。年代別に見ると「地域のスポーツイベントの運営やサポート」を希望するのは、60代が55.9%と最も多く、「全国的・国際的なスポーツイベントの運営や世話」を希望するのは20代が35.2%となっていて、スポーツイベントといえど年齢や性別によって異なる傾向が見られた。

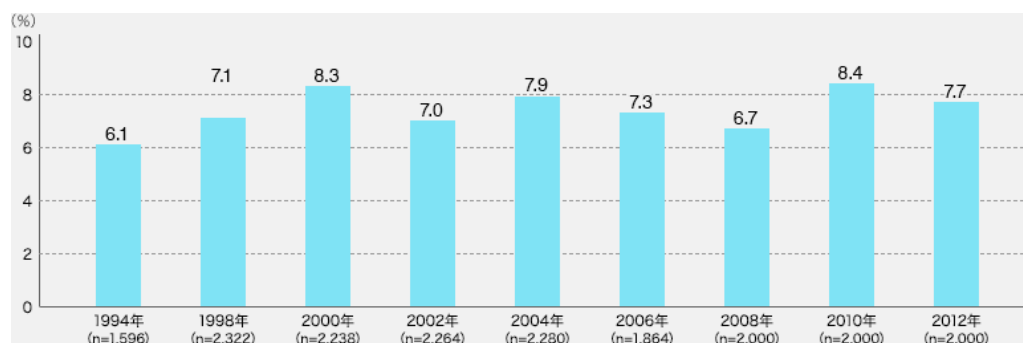


図4 スポーツボランティア実施率の年次推移

出所：笹川スポーツ財団「スポーツラインに関する調査」2012

表1 成人のスポーツボランティア活動内容・希望内容

活動内容	実施率(n=133)	希望率(n=315)
地域のスポーツ大会・イベントの運営や世話	39.1	42.9
日常的な団体・クラブの運営や世話	37.6	27.3
日常的なスポーツの指導	28.6	25.4
日常的なスポーツの審判	18.0	9.8
地域のスポーツ大会・イベントの審判	17.3	10.5
日常的なスポーツ施設の管理の手伝い	9.8	17.8
全国・国際的なスポーツイベントの運営や世話	3.8	14.0
全国・国際的なスポーツイベントでの審判	0.8	1.6

出所：笹川スポーツ財団「スポーツラインに関する調査」2008

福岡市の現状については、以下の3団体にヒアリングを行なった。

①福岡市スポーツ協会

スポーツボランティアの登録を以前は行なっていたが、団体からのボランティア要請がほとんどなかったため現在では行なわれていない。ボランティアを行いたい場合は直接団体連絡に連絡しないと情報を得ることができない。

②あすみん（福岡市 NPO・ボランティアセンター）

登録団体の中で、スポーツを視点に行うものは、ほとんどなかった。アビスパ福岡のボランティアは掲載されているが、他のスポーツ団体はなく、参加したい場合は、自分で団体に連絡しボランティア活動に参加するしかない。

福岡市内ではアビスパ福岡やライジング福岡といったプロスポーツ団体のイベント時や福岡マラソン等の単発のイベント時のみの参加となり継続的に関わることのできるボランティア情報を得ることができなかった。

③西日本短期大学健康スポーツコミュニケーション学科

西日本短期大学は、福岡市中央区にある6学科を擁する総合短期大学である。そのなかにある健康スポーツコミュニケーション学科は、「健康」と「スポーツ」をささえることができる人材の育成を目指している。様々な地域活動に参加しており、その一例として「西短キッズスポーツフェス

ティバル」では、「運動神経を高めよう」をテーマに学生が企画運営し、地域のこどもたちや保護者が参加し行われた。昨年も開催されたイベントであるが、2回目の参加者も多く、参加した保護者からは、次回開催要望も多数あった。学生が実際に企画・運営することで、今後のキャリア形成につながり、また多様な世代と交流する機会を得ることができたようだ。

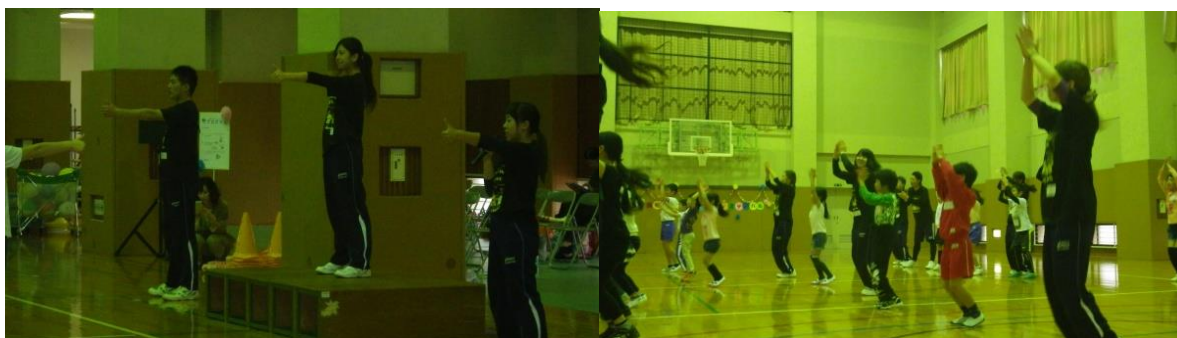


写真1 イベントの様子

出所：著者撮影

4 先行事例

（１）鹿児島県鹿屋市と鹿屋体育大学

鹿屋体育大学は、鹿児島県鹿屋市にある国立大学としては唯一の4年制単科大学である。学生の出身地の約50%が九州出身、のこりがその他全国の都道府県に渡っており、学生がボランティアとして地域でスポーツ指導を実施することで、地域のスポーツ振興と学生の指導力を高めることを目的に地域連携事業が行われている。

鹿屋市では、スポーツや健康づくりにおける指導者不足や子どもの運動部離れと、中高年の運動不足解消といった課題があり、大学側としては指導経験を多く積みたいという学生の要望への対応や正規教育のみによる実践的指導者養成への限界の解消という課題があった。そのため、体育大生のマンパワーの活用と学習（指導）指導機会の拡大を目指し、学生のスポーツボランティア活動の支援に乗りだした。

そのためには、事前研修や安全・保険対策（損害賠償）について、また事後指導や教育効果の評価など体系的な整備行なった。「実践的指導力」が高まるように学生の指導力について総合的に判断し、その結果をフィードバックすることで指導力改善の学習サイクルを支援するようにした。

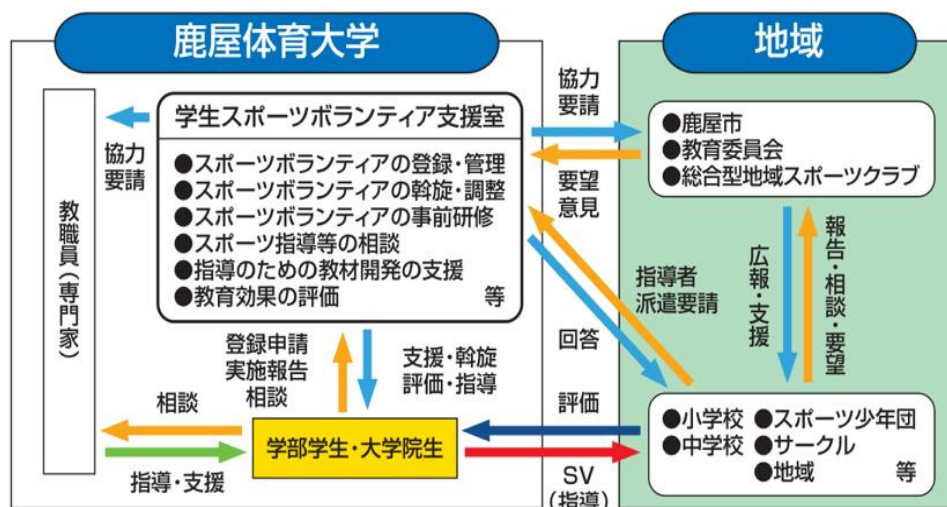


図5 実施体制

出所：「スポーツ・武道の実践的指導力を育む」，鹿屋体育大学 2007

（２）グランディ 21 ボランティア（宮城県宮城郡利府町）

宮城スタジアムを中心に、2004年活動開始。公設民営施設型ボランティア組織で、年間活動人数：6日、述べ436人が活動している。中高生を対象にした「チョイボラ（ボランティア体験）制度」があり、合計4日程度活動し、活動証明書を発行している。Ｊリーグベガルタ仙台だけでなく陸上競技大会や宮城スタジアムで開催されるイベント時やスタジアム見学案内などの活動を行っている。東日本大震災の時には、非常体制になった宮城県総合運動公園（グランディ21）のサポートを行なった。

（３）先行事例からの考察

鹿屋体育大学の事例より、ただ、人手としてボランティアを考えるのではなく大学生にとってボランティア活動を通じて得ることができる教育効果を考慮し、制度を作ることにより効果が生まれることが大切であるということがわかる。また、各スポーツ団体が個別にボランティアを抱えてしまうことにより、その競技以外のスポーツに接する機会を作り出すことが難しいが、「スタジアム」という単位で活動することができればメジャースポーツ以外でもボランティアが確保でき、ボランティアも多様な機会を得ることができる。一度ボランティアという形で、新しいスポーツに関わることによりそのスポーツのファンとなり、その会場以外での開催の際にもボランティアとして参加することも期待され、スポーツ組織は、新たなボランティアを確保することもできる。

5 提言

（１）戦略を持ってボランティアを人的資源として活用していくこと

スポーツボランティアの重要性は、今後益々大きくなっていく中で、ボランティアを行う人の年齢や職業、ニーズなどを把握・分析ボランティア活動の参加者も顧客の一人という考えのもとに活動に適したボランティアを集めることが鍵となってくると考える。スポーツイベントは、地域のスポーツイベントから国際大会まで多岐に渡り活動の内容も多様化しているためこういった考え方をもとに募集をし、管理していくことでスムーズなボランティアマネジメントを行うことができる。

また、鹿屋体育大学と鹿屋市のように地域課題の解決に大学側のもつ課題を結びつけて事業を行なうことで大学生の地域での活動のきっかけとしてスポーツが役割を担うことも期待される。

（２）マッチングできる仕組みづくりを行うこと

福岡市では、大学生に限らずスポーツボランティア活動を希望している人とボランティアを望む側とのマッチングする仕組みが整っていない。(1)で述べたことをもとに戦略を持ってマッチングしていくことのできる仕組みづくりができれば、1日限りの活動で終わるのではなく継続して活動をしていくことができると考える。

（３）地域を意識した活動の充実

福岡市内でも多くのスポーツイベントが開催されているが、スポーツイベントを実施後に地域の日常的なスポーツボランティア活動、例えば「スポーツの指導」や「団体・スポーツクラブの運営」につながる活動を行なっていくことができれば、地域活動への参加のきっかけをつくることになる。イベント終了後も地域のスポーツ振興に活かしていくために、イベント開催中の活動に地域活性化を意識した内容をいれていくことも重要である。

以上が福岡市に対する提言であるが、根幹には、スポーツボランティアを楽しむ文化の醸成がある。スポーツボランティアを自ら楽しみ活動していくことで、「する」「みる」だけでなく様々なスポーツに接する機会を自分のライフステージや環境に応じて増やすことができる。また、ボランティアの協力を得て、ボランティアを望む側（スポーツ組織）に「こういったこともお願いして大丈夫」という事が増えていけば、よりスポーツ組織の充実も期待される。

また、スポーツボランティアをきっかけに地域社会との接点を大学生がもち、地域での活動に参加するようになることで大学生の力を使った街づくりの展開や就職後の地域活動への参加もより身近なものとなり福岡市におけるスポーツ振興や街づくりへ参加も期待したい。

〈参考文献〉

- (1) 『福岡市基本計画の成果指標に関する意識調査』, 2012年
- (2) 『福岡市スポーツ振興計画』, 福岡市, 2009年
- (3) 『スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究』, 文部科学省, 2000年
- (4) 『学校基本調査』, 文部科学省, 2014年
- (5) 桜井政成・津止正敏: 『ボランティア教育の新地平 サービスラーニングの原理と実践』, 2009年
- (6) 山口泰雄: 『スポーツボランティアへの招待』 世界思想社, 2004年
- (7) 桜井政成・津止正敏: 『ボランティア教育の新地平』 ミネルヴァ書房, 2009年
- (8) スポーツビジネス最強の教科書
- (9) 掘繁・木田悟・薄井光裕: 『スポーツで地域を作る』 東京大学出版, 2007年

スポーツをする人をサポート ー食の観点からー

市民研究員 森満 美枝

1 はじめに

私たちの住む福岡には、大きな経済効果をもたらすプロスポーツチーム（野球・サッカー・バスケットボール）をはじめ、毎年全国大会で多くの好成績を残す学生チームや個人が存在している。また、そのような大きなチームだけでなく地域の中でコミュニケーション作り、健康作りにおいて大きな役割を果たしている公民館サークル、青少年育成のための少年少女対象のスポーツチーム、中・高校生の部活動チームも多数存在する。

また、これらは、観る人・スポーツする人・支える人により成り立っており、それぞれの立場から役割や見えるものが違うと考えられる。「自分がスポーツをするのは苦手だが、野球観戦は好き」、「まったく興味がない」、「子どもがスポーツチームに所属している」、「趣味でスポーツクラブに通っている」など様々な立場の人々がいるが、立場が違っても共通のキーワードがある。

それが『食』である。

観る人にとっては、観戦中食べる食事（弁当や飲み物）、スポーツする人にとっては、日々の食事や試合前、大会の日の食事、支える人にとっては作る食事のカロリー計算を含めたメニュー作成などそれぞれ立場は違っても人間は生きていくうえで、『食』は絶対に必要なものであり、特にスポーツをする人にとっては重要なものである。

今回は、この『食』をキーワードにスポーツとの関わりと、役割、可能性について考えていく。

2 第1回福岡マラソン開催

平成26年11月9日（日曜日）第1回福岡マラソンが開催された。本大会は平成26年福岡市主要施策概要「人と環境と都市活力の調和がとれたアジアのリーダー都市」を実現する重点分野3項の中に挙げられており、予算1億671万7千円、糸島市と連携して福岡の魅力を国内外に発信するとアピールしている。実際、参加希望者が多く抽選で当選した約1万人の人々が参加し、沿道の応援も大いにもりあがっていた。

（1）ボランティアの力

そこには、ボランティアの力がなければ成り立たなかったと思わせるほど、前準備から当日の準備、選手へのサポートまで幅広い活躍が見られた。

（2）沿道・地元の方々の応援

沿道では、店舗前で自店の商品をランナーに振る舞ったり、子どもダンスチームの演技などで大会を盛り上げていた。また、ゴールの糸島でもステージ上で様々な芸能発表があったり、地元の果物、野菜の販売や食べ物の屋台が数多く出店されており多くの人で賑わっていた。さらにマラソン出場者には無料で豚汁が振る舞われたり、果物のプレゼントがあり喜ばれていた。丁度、ゴールの時間が昼食時間と近かった事もあり行列の出来ている店もあった（写真1～4）。

（3）ホームページ上でのレシピ集

福岡マラソンのHP内に、福岡で活躍されているゴトウタカコさん¹⁾のレシピ集があり、地元の食材を使ったトレーニング時期に合わせた様々な料理が紹介されていた。そこで使われる材料紹介では、細かく産地まで記載されている。とてもおしゃれで丁寧に作られており、もっと多くの方に見つけてもらえる場所において紙媒体で配布できたら良かったのではないかと思います。



写真1 沿道での応援の様子



写真2 ゴール地(糸島)での食のイベント



写真3 沿道での応援ステージ



写真4 完走者の喜びの様子

出所:ともに著者撮影

3 『全食力』の開催

福岡マラソン開催が正式に発表され、参加者募集と同じ頃、アスリートフードマイスターの野口里紗さんと、野菜ソムリエの内田陽子さんが『全食力』というイベントを企画した。

(1) 野菜ソムリエとは

野菜ソムリエは、アスリートフードマイスターと同じ団体の資格で、3段階のコースに分かれている。

①ジュニア野菜ソムリエ

野菜、果物の魅力を知り、自ら楽しむ事を目的としている。

(※2015年1月末日現在)

表1 都道府県別野菜ソムリエ資格取得者データ

	月末		
	JY	Y	SY
北海道合計	2,098	150	9
青森	384	21	2
岩手	507	25	4
秋田	241	12	0
宮城	901	53	4
山形	263	17	1
福島	388	18	0
東北合計	2,684	146	11
東京	9,771	514	22
神奈川	4,245	211	9
埼玉	2,397	126	5
千葉	2,271	103	2
茨城	742	41	1
栃木	450	22	0
群馬	484	28	2
関東合計	20,360	1,045	41
新潟	494	29	1
福山	332	22	1
石川	415	18	2
福井	329	18	2
山梨	232	14	2
長野	661	43	2
甲信越・北陸合計	2,463	144	10
岐阜	512	11	0
静岡	1,178	51	2
愛知	3,248	155	6
三重	420	19	1
東海合計	5,358	236	9
滋賀	355	22	1
京都	1,001	45	2
大阪	3,484	147	5
兵庫	1,936	89	7
奈良	496	24	3
和歌山	235	16	1
近畿合計	7,507	343	19
鳥取	132	9	1
岡山	496	30	3
広島	674	37	1
島根	120	5	1
山口	282	17	1
中国合計	1,704	98	7
香川	301	18	2
高知	451	19	2
愛媛	589	41	5
徳島	272	20	1
四国合計	1,613	98	10
福岡	2,159	92	4
佐賀	210	5	0
長崎	290	17	0
熊本	626	17	1
大分	468	14	3
宮崎	312	12	1
鹿児島	551	14	1
九州合計	4,616	171	10
沖縄合計	404	15	1
合計	48,807	2,446	127

出所：日本野菜ソムリエ協会並びに株式会社アスリートフードマイスター

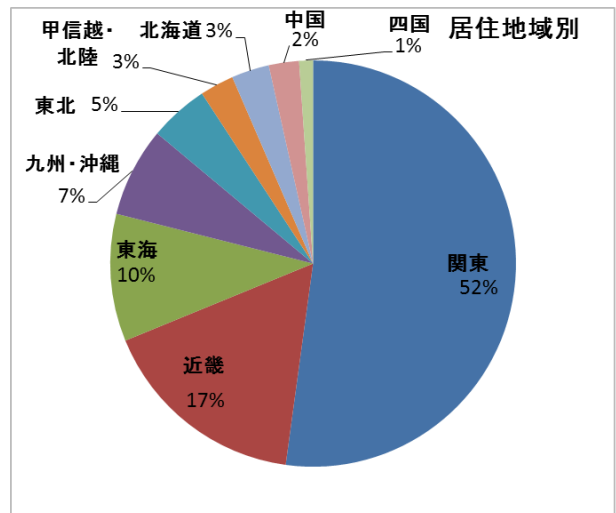
※JY；ジュニア野菜ソムリエ、Y；野菜ソムリエ、SY；シニア野菜ソムリエ

(※2015年1月末日現在)

	2015年01月末		
	JAM	AFM	BCT
合計	4,364	132	177
北海道	131	3	3
青森県	8	1	1
岩手県	20	0	2
秋田県	11	0	0
宮城県	115	4	5
山形県	29	1	2
福島県	24	2	4
東北合計	207	8	14
東京都	1,197	36	50
神奈川県	458	16	31
埼玉県	255	8	14
千葉県	239	6	16
茨城県	59	0	2
栃木県	31	0	4
群馬県	32	4	3
関東合計	2,271	70	120
新潟県	33	3	1
福山県	25	1	0
石川県	11	1	1
福井県	13	0	0
山梨県	8	0	2
長野県	27	0	0
甲信越・北陸合計	117	5	4
岐阜県	41	2	0
静岡県	86	2	5
愛知県	269	8	10
三重県	44	1	1
東海合計	440	13	16
滋賀県	53	2	1
京都府	117	2	3
大阪府	332	11	2
兵庫県	183	2	4
奈良県	27	1	0
和歌山県	14	1	1
近畿合計	726	19	11
鳥取県	5	0	0
岡山県	25	3	1
広島県	65	1	0
島根県	6	2	1
山口県	13	0	0
中国合計	114	6	2
香川県	13	0	0
高知県	6	0	0
愛媛県	22	2	0
徳島県	7	0	0
四国合計	48	2	0
福岡県	153	4	5
佐賀県	9	0	0
長崎県	18	0	0
熊本県	36	0	0
大分県	25	1	0
宮崎県	28	0	1
鹿児島県	15	0	1
九州合計	284	5	7
沖縄県	26	1	0

JAM 地域集計

JAM合計	4,364	100%
関東	2,271	52.0%
近畿	726	16.6%
東海	440	10.1%
九州・沖縄	310	7.1%
東北	207	4.7%
甲信越・北陸	117	2.7%
北海道	131	3.0%
中国	114	2.6%
四国	48	1.1%



※JAM；ジュニアアスリートフードマイスター
AFM；アスリートフードマイスター
BCT；ボディーケアセルフトレーナー

図1 居住地域別野菜アスリートフードマイスター資格取得者データ

出所：日本野菜ソムリエ協会並びに株式会社アスリートフードマイスター

②野菜ソムリエ

野菜と果物の魅力を伝えるための資格で通学か通信教育で学び、資格試験を受ける。

③シニア野菜ソムリエ

野菜ソムリエの資格を持っている者が、更に深く学びスキルを磨き取得するワンランク上の資格である。

この他に、子ども（年中～小学6年生）を対象にしたキッズ野菜ソムリエがある。野菜ソムリエが主催するキッズイベントに参加しセミナーを受講すると「キッズ野菜ソムリエ任命書」が授与され、友達に野菜・果物の魅力を伝えるという任務が与えられる。子どもが楽しみながら野菜・果物に触れられるようイベントなども開催されている。

野菜ソムリエの実際の仕事の活動内容としては、自分で直接農家に出向き収穫体験と取れたて野菜や果物が食べられるイベントを企画したり、カルチャーセンターや公民館での料理教室の講師、スーパーで自身が考案した調理方法を提案しながら販売する販売員など多様な活躍をしている。ここでいえるのは、市民に身近な存在であるということだ。

（２）アスリートフード・アスリートフードマイスターとは

アスリートフードというと、何か特別なものを食べていると思いがちだが、基本的に普通の「健康的な食事」と変わらない。スポーツをする人にとってももちろん日頃のトレーニングが重要だが、トレーニングをより良い状態で継続させるためにも、また、日頃のトレーニングの成果を本番で充分に発揮させるためにも、毎日「バランスのいい食事」を取り、体調を崩さない事が何より重要である。

- ・年齢や性別
- ・目的
- ・食べるタイミング

によって食事の内容を工夫する事もアスリートフードの特徴だといえる。

表２ 普通の健康的な食事とアスリートフードの比較

	相違点	共通点
普通の健康的な食事	現代社会では、普通に食べると食べ過ぎる事から「食べ過ぎない事」が重視される。	さまざまな栄養素や食材・調理法を取り入れバランスよく食べる。
アスリートフード	アスリートが必要とする栄養素は、普通に食べるだけでは不足する事から「不足しない事」が重視される。	

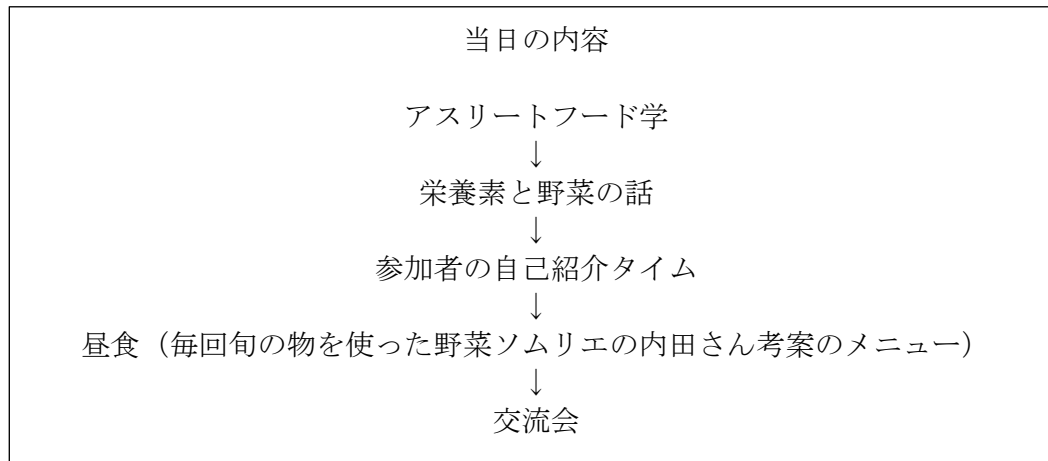
出所：アスリートフードマイスター 野口里紗氏

アスリートフードマイスターとは、一言で言うと「スポーツに役立つ食の知識を伝える」民間団体の資格で、2015年1月現在、九州で4名しか持っていない。

（３）『全食力』のイベント

全食力のイベントは、福岡市赤坂にある25人ほどが入れるカフェで開催された。

主催者のブログ、こくちーず、Facebook、チラシを使って告知し、定員20名。4回シリーズで行われた。トレーニング期の食事から大会直前の食事まで、計画的に構成されており、福岡マラソン参加者だけでなく日頃運動をしている人、ダイエットに興味がある人、栄養士や野菜ソムリエなど食に対する意識が高い人、このようなコミュニティが好きで参加した人、など参加者の年齢、職業、性別などはさまざまであった。



という流れで構成されていた。



写真5 『全食力』のポスターとイベントの様子

出所：（ポスター：アスリートフードマイスター野口里紗氏、野菜ソムリエ内田陽子氏）
（写真：著者撮影）

具体的な内容は、
《トレーニング期の食事》

①運動前

運動開始2～3時間前に食事を取り、消化・吸収をほぼ終えた頃に運動を開始するのが理想。

②運動中

エネルギー切れを起こさないように、糖質を補給する。

※運動前に十分なエネルギー補給が出来ていれば、30分～1時間程度の運動では必要ない。

③運動後

身体の回復・修復の為に運動後約1時間以内にバランスのいい食事を取る事が理想である。出来ない場合は、代わりにおにぎり、パン、ゼリー飲料など糖質中心の食品を摂取した後、バランスのいい食事を取る事が重要。

（４）『全食力』の果たした役割

参加者の感想は、「今まで好きな物を好きなだけ食べていたけれど、このイベントに参加して食事に対する意識が変わった」、「食べるものだけでなく食べるタイミングも大事だと分かった」という食に対することだけでなく、「知り合い（仲間）が増えた」、「たまたまボイストレーニングの指導をされている方と知り合い、早速その方の指導を受けに行った」などコミュニティーとしての役割も大きい事に気付かされた。

また、野菜ソムリエの内田さんは同じく野菜ソムリエの方と『太陽のスプーン』という名のグループを立ち上げ①季節に合わせた野菜や果物の収穫体験②生産者との交流③その野菜や果物を使った料理をいただく、この３つをセットにしたイベントを企画運営し、好評を得ている。このような情報も今回の全食力のようなイベントや口コミで広がっていた。

4 栄養士と野菜ソムリエの違い

栄養士と管理栄養士、アスリートフードマイスターと野菜ソムリエ。それぞれ資格や役割がそれぞれ分かれている。下記の図３で説明する。

栄養士	栄養学に基づいて、栄養バランスの取れたメニューの作成や、調理方法のかいぜん、栄養面から健康な食生活のアドバイザー	栄養士養成施設として認定された学校(昼2年)でその課程を履修して卒業しなければならない。《国家資格》
管理栄養士	栄養指導のための企画や疾病者に対する療養のために必要な栄養の指導、大規模給食施設における管理業務や労務管理	栄養士の資格を所持しているものが、年1度実施される「管理栄養士国家試験」に合格しなくてはならない。(修行期間などの条件あり)《国家資格》
野菜ソムリエ	野菜・果物の魅力を伝えるために、様々な知識(目利き、保存方法、栄養価、料理方法など)を身に着けた上で、畑から食卓までの架け橋になる事を使命とする	通学・通信制の講義を受講後、修了試験に合格する
アスリート フード マイスター	アスリートをより深く理解し、スポーツに役立つ食の知識を伝える	ジュニアアスリートフードマイスターに合格した者が、通学・通信制の講義を受講後、筆記試験、面接試験に合格する

図2 栄養士、管理栄養士、アスリートフードマイスター、野菜ソムリエの比較

出所：全国栄養士養成施設協会、野菜ソムリエ協会、株式会社アスリートフードマイスター資料より筆者作成

野菜ソムリエやアスリートフードマイスターはあくまでも民間の資格であり、栄養士のように何年も学校に通い学んだものが取れる資格とは異なるので、趣味の一環として取得している方もいれば野菜ソムリエとして野菜・果物の美味しい食べ方や栄養について仕事として広める活動をしている方もおり、同じ資格所有者でも個人の意識の違いによって活動内容が異なる。

栄養士や管理栄養士は、実際に学校給食や病院などでの献立を考えたり実際に調理する方もおり、国家資格なので仕事としての資格といえる。また、野菜ソムリエと管理栄養士、どちらの資格も取得している方もいるが、インタビューすると学ぼうとする意識が高く、この知識を人に伝えられるようになりたいと思っている向上心の高い人だった。

5 国内外の事例

(1) 「スポーツ」と「食」を学ぶ「スポーツ食育推進事業」(藤枝市)

スポーツ医・科学の研究の発展と共に、近年では大奥のアスリートが競技力を高めるためにスポーツ栄養学をトレーニングの一部として取り入れている。「スポーツ」と「食」の必要性はアスリートのみならず、市民の健康の維持・増進のために重要な要素である。こうしたことから、藤枝市のスポーツ振興課では平成24年度より、「スポーツ」と「食」にスポットを当てた「スポーツ食育推進事業」を進めている。レシピ集も作られており、その内容は基本的な栄養バランスの話から、試合前後の食事の紹介、レシピ集(パワーご飯・疲労回復)、地元プロサッカー選手の話など内容も充実している。市民が気軽に手に取る事ができ、この冊子のレシピを1つでも作ってみようかな、と思わせるカラーで見やすい物となっている。特に地元のプロ選手に日頃の食についての考えを聞く事は、プロスポーツチームが多い福岡でも可能な事ではないか。またその地元のプロ選手の話は、たくさんの人が興味関心を持っていると思われる。



図3 藤枝市のスポーツ食育推進事業のポスター

出所：藤枝市ホームページ

(2) 「スポーツイベント」と「地域の食べ物」を連携

(韓国・星州チャメ全国マラソン大会)

星州(ソングジュ)で行われたマラソンで、地域の特産物であるチャメ(韓国風のメロン)を賞品として提供すると共に、完走者には地元料理が無料で振る舞われた。地元特産品をアピールできる良い機会である。体を動かした後は、必ず空腹になるし応援の方々も昼時になれば何か食べようかと考える。そのような時、その土地の食べ物があれば食べたいと思うし、地元の方々もその土地の特産物や料理をアピールできるいい機会にもなる。このようなユニークな試みもすぐ近くの韓国で行われ、新聞記事にもなっている。福岡も話題性、地元特産品アピールという面では参考に出ると思われる。



図4 韓国・星州チャメ全国マラソン大会の様子

出所：韓国毎日新聞

6 スポーツと食、未来へつなげるために

(1) 福岡だからできる事、福岡にしかできない事

ひとが生きていく上で必ず必要となる栄養(食)と健康を維持する上で欠かせない運動。近年、健康ブームで食べるものや、適度な運動を行い健康維持に気をつけている人が増加しているが、その方々が持続性を持ち楽しく継続していけるように引き続き情報や環境を提供していく必要がある。

海や山の幸に恵まれ、物価もさほど高くない福岡。住んでいる人はもちろん仕事や留学で福岡に住んでいる方々や観光客にもこの『食』を味わい楽しんで頂きたい。特に九州では他の地域に比べ大きな観光地や温泉などがないのでこの食べ物で皆さんの期待を裏切らないようにしなければ、本当に九州の玄関(通過するだけ)になってしまう。

将来は、

- ・誰もが楽しく生き生き暮らせるまち
- ・趣味を通じて、自分の居場所があるまち
- ・福岡だけでなく、世界に福岡の食と人財をアピールできる機会をつくり、福岡を拠点に活躍できる人を生み出せるまち
- ・「福岡＝食べ物おいしい」というイメージを維持しながら、多文化・多宗教に対応した食の細かい配慮が自然にできるまちになるべきだ。

そのためには、大きなイベントだけではなく、気軽に参加しやすい小さなイベントを開催し、継続的なものから単発的なものまでさまざまなニーズに合わせた企画を作る必要があるのだが、この時、スポーツや食のイベントに関してはアスリートフードマイスターや野菜ソムリエの方々に企画段階から参加してもらい、企画運営までしていただいたら今までにない楽しいものが提案されるのではないだろうか。

(2) 提言1

もっと身近に、もっと気軽に

- ・野菜ソムリエやアスリートフードマイスターの方々と市民が接する機会を設ける。

カロリー計算やメニューを考案する栄養士よりも市民に身近で季節やその土地に応じたその時々にあった食べ物を提案する力がある。

- ① 市は場所や資金を提供（サポートする）
- ② 企画・実施は野菜ソムリエやアスリートフードマイスターが主体となり行う
- ③ 気軽につどい、質問や会話ができる雰囲気の場作り

（３）提言２

もっと食事を大切に、もっと身体を大切に

プロのアスリートたちに聞く食生活

- ① どういった食事を食べているのか
- ② 食事に関して気をつけていること
- ③ アドバイスなど

せっかく身近にたくさんいるプロの選手たちに直接に聞いたり、紙ベースで知る機会を行政が主体となって継続的に行う。

（４）福岡市の人財

福岡市には、恵まれた食材だけでなく、なんといってもたくさんの才能あふれる人々が住んでいる。このたくさんの人々が、それぞれ自分の特技を生かし活躍できる場所が増えていく事を望む。また、たくさんの留学生や海外から来られた方などにもたくさんの知恵と知識、意見を頂きながら更に成長し続ける都市でなければならないし、そうなると信じている。

〈注釈〉

- 1) 野菜料理家ゴトウタカコ氏は、カタカナの名前で活躍されている⁽⁸⁾。

〈参考文献〉

- (1) 『スポーツを通じた地域活性化に関する基礎的研究』，北九州市立大学都市政策研究所2009年度地域課題研究，2010.3
- (2) 福岡市主要概論2014
- (3) 福岡マラソンホームページ <http://f-marathon.jp/> 2015.2
- (4) 野菜ソムリエ協会ホームページ <http://www.vege-fru.com/> 2015.2
- (5) 株式会社アスリートフードマイスターホームページ <http://athlete-food.jp/> 2015.2
- (6) 一般社団法人全国栄養士養成施設協会ホームページ <http://www.eiyo.or.jp/> 2015.2
- (7) 藤枝市ホームページ <http://www.city.fujieda.shizuoka.jp/> 2015.2
- (8) ベジキッチンホームページ <http://www.0831bagel.com/profile> 2015.2

市民研究員 平成26年度の歩み

1 市民研究員受入事業

公益財団法人福岡アジア都市研究所は、産学官の協力と連携のもとに、都市政策を研究し、福岡市の将来の都市戦略を考える研究機関として、福岡市により昭和63年に福岡都市科学研究所として設立され、その後平成16年度にアジア太平洋センターとの統合を経て名称変更、アジアの視点をも取り込んだ都市政策を提言する研究所となっています。

当研究所では、市民の方々に自主的な立場での研究を通して、まちづくりへの認識を深めていただき、また、交流の輪を広げることにより、まちづくりのリーダーとなっただくことを目的として、平成12年度より毎年、市民研究員受入事業を実施しています。

対象者は福岡市またはその近郊にお住まいの方で、月1～2回程度の定例研究会に参加できる方です。毎年5月に募集を行い、5、6名程度の方々に、身近なまちづくりについて研究いただいています。

開始から15年目となった平成26年度は、応募者のうち3名の方に市民研究員を委嘱し、『スポーツを生かしたまちづくり』について熱心に研究いただきました。

2 活動実績

平成26年

- | | |
|--------|---|
| 5月7日 | 平成26年度市民研究員募集開始 |
| 7月2日 | 平成26年度市民研究員選考（面接） |
| 7月17日 | 第1回定例研究会
・委嘱状交付式 ・趣旨説明（柳 研究員より）
・テーマ説明（各研究員より） ・オリエンテーション |
| 7月31日 | 第2回定例研究会
・研究テーマに関するグループ討議 |
| 8月6日 | 第3回定例研究会
・研究テーマに関するグループ討議 |
| 8月21日 | 第4回定例研究会
・研究テーマに関するグループ討議 |
| 9月11日 | 第5回定例研究会
・研究テーマに関するグループ討議 |
| 9月24日 | 第6回定例研究会
・研究作業計画書の発表と講評 |
| 10月9日 | 第7回定例研究会
・研究作業計画書の発表と講評、研究作業の進捗状況報告 |
| 10月23日 | 第8回定例研究会
・研究作業の進捗状況報告 ・著作権に関して |

11月13日	第9回定例研究会 ・研究成果中間発表会、意見交換会
11月17日	第10回定例研究会 ・中間発表会の振り返り
11月27日	第11回定例研究会 ・進捗状況共有
12月2日	第12回定例研究会 ・進捗状況共有
平成27年	
1月8日	第13回定例研究会 ・論文の目次と骨格について／提言内容の検討
1月29日	第14回定例研究会 ・進捗状況共有
2月5日	第15回定例研究会 ・進捗状況共有
2月12日	第16回定例研究会 ・最終発表会プレゼンテーション案の共有
2月19日	第17回定例研究会 ・最終発表会プレゼンテーションリハーサル
3月1日	研究成果発表会（アクロス福岡セミナー室2） ・研究発表、意見交換
3月23日	副市長報告会、修了式

◆平成26年7月17日 委嘱状交付



◆平成26年7月17日 全員で記念撮影



◆平成26年11月13日 研究中間発表会



◆平成27年3月1日 研究成果発表会



◆プレゼンテーション



吉田さん



古川さん



森満さん



活発な質疑

平成 26 年度 市民研究員研究報告書

『スポーツを生かしたまちづくり』

発 行 : 平成 27 (2015) 年 3 月

発行者 : 公益財団法人 福岡アジア都市研究所

住 所 : 〒810-0001 福岡市中央区天神 1 丁目 10-1

電 話 : 092-733-5686 Fax : 092-733-5680

E-mail : info@urc.or.jp

U R L : <http://www.urc.or.jp>

印 刷 : 株式会社ジーエークレアス

